

国際子ども図書館 の 窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く！

第 8 号
2008.3

表紙デザイン：熊谷 博人氏

【2007年のハイライト】 より
 科学をテーマに：展示会「大空を見上げたら―太陽・月・星の本」



講演会「神話から最新宇宙学まで」
 講師：福江 純氏 （2月17日） p.39



講演会「天文の魅力を探る」
 講師：西城 恵一氏 （4月22日） p.39



講演会「昔話が語る天体」
 講師：小澤 俊夫氏 （8月28日） p.40



展示会場：太陽の塔 p. 4



小冊子 p. 4

【特集：世界を知る】より エジプト、イランの児童書出版と児童サービス

<エジプト>



カイロ国際ブックフェア

p.30



ムバラク図書館

p.31



未来図書館のコンピュータ教室

p.31

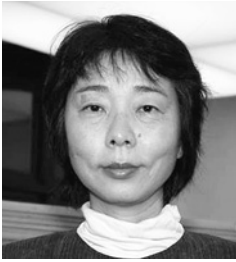
<イラン>



イラン児童文学史研究所のスタッフと

p.32

は じ め に



第二次世界大戦後の1953年にスイスで設立された国際児童図書評議会（IBBY）は、その使命の第一に「子どもの本を通して国際理解を進めること」を掲げています。この言葉には、「子ども」と「本」双方に対する信頼と平和への希求が込められています。国際子ども図書館がその名称に「国際」を冠し、「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く！」を標語としているのも、同じ想いからです。21世紀になっても、世界各地で、国・地域・民族・言語・宗教の違いによる紛争が絶えません。他者を理解すること、そして多様性を受容することが今もなお求められる所以です。

2007年も、児童書を通して国際理解を深めるために、講演会や展示会を行いました。夏には、IBBY のアルダナ会長を日本にお招きして、多文化社会カナダにおける児童書出版について講演をしていただきました。これがきっかけとなってIBBY のホームページから当館の電子展示会「絵本ギャラリー」英語版へリンクが張られたのもひとつの新しいつながりと言えるかもしれません。また、児童サービスと児童書出版の現状調査のために、職員をエジプトとイランに派遣したことが、イランの児童書の寄贈や10月のエジプトの読書運動に関する講演会に繋がりました。今回で3回目になる展示会「ゆめいろのパレットⅢ」も、絵本原画や絵本を通して他国の文化や伝統を理解する試みです。

2007年は、初めての科学ものの展示会である「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」展を開催し、秋には3日間の児童文学連続講座「絵本の愉しみーアメリカ絵本の展開ー」を開講しました。また、新しい試みとして、夏休み子ども向け図書館見学ツアーや児童サービス連絡会を企画・実施しました。

8月に実施した来館利用者アンケート調査結果によれば、2年前に比べて、子どもたちの満足度が全体に上がってきており、公共図書館とは違った「子どもと本のふれあいの場」として楽しんでもらっているようです。しかし、ヤングアダルト向けサービスや遠隔サービスの充実など、課題も残っています。

すでに開館時からの懸案であった施設拡充については、2005年3月に受けた「国際子ども図書館の図書館奉仕に関する調査会答申」に基づき、昨年度から2か年かけて、敷地・建物調査を実施し、夢を現実に作り変える作業を行っているところです。しかし、施設の増築や改修が実現するまでにはまだかなりの歳月がかかります。すべての条件が整うまで座して待つのではなく、業務・サービス面で少しでも改善できることがあれば、速やかに実行に移していくことが大切です。春になれば、若芽が吹くように、毎年少しずつではあっても伸びていく国際子ども図書館でありたいものです。

2008年3月

国立国会図書館国際子ども図書館長 齋藤 友紀子



【口 絵】

【はじめに】 = 齋藤友紀子 1

【2007年のハイライト】

科学をテーマに：展示会「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」
= 「大空を見上げたら」展示班 3

展示会「ゆめいろのパレットⅢー野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」
= 「ゆめいろのパレットⅢ」展示班 6

講演会「多文化社会における児童書・児童サービス」
ーアルダナ IBBY 会長を迎えてー = 企画協力課企画広報係 8

平成19年度児童サービス連絡会
ー児童サービスの実際と課題ー = 児童サービス課 11

コラム 大好きな本に出会おう！
ー子どものへや・世界を知るへやの小展示ー = 石川真理子 15
児童文学連続講座「絵本の愉しみーアメリカ絵本の展開ー」
= 企画協力課協力係 16

電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテンツ
「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」= 企画協力課企画広報係 18

【特集：世界を知る】

ポーランドの児童書事情 = 小原 雅俊 19
オランダ・ベルギーの児童書 = 野坂 悦子 24
コラム ボローニャブックフェアでの出会いから = 藤代 亜紀 29
エジプト、イランの児童書出版と児童サービス = 酒井貴美子 30

【調査・研究報告】

戦中期「講談社の絵本」の<子供知識絵本> = 吉田 新一 33

【活動報告】 38

【数字で見る！国際子ども図書館】 47

【これから…】 52

【利用案内】 53

科学をテーマに 展示会「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」

はじめに

2007年2月10日(土)から9月9日(日)まで、国際子ども図書館（以下、当館）では「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」展（以下、大空展）を開催した。今回の展示の最大の特徴は科学をテーマにした点である。子どもの読書離れや科学離れについて何かと話題に上る昨今、当館の展示会では文学に焦点をあて、さまざまな切り口で内外の児童書を紹介し、多くの人々に「児童書」への興味を持ってもらうよう工夫してきた。一方で科学教育への取りくみを当館に求める声も少なからずあった。そこで、夏季に行う科学あそびのイベントのほか、展示会でも科学を扱ってみることにした。当館で科学をテーマにした展示会や各種イベントを行うことは、本を通して子どもたちの科学への興味を培い、また科学を通して本への興味を喚起する機会になると考えたからである。

展示の特徴

科学をテーマとした展示会をどう作るか。大空展では、児童書専門図書館である当館の資料と科学をどうつなぐかが焦点となった。天文学や宇宙科学を扱う専門の博物館や科学館が多くある中で、当館が取り組む意味とは何かということである。監修者の西城恵一氏（国立科学博物館主任研究員）を中心に展示会担当職員らで意見を交わし、次の点に留意した。

- ① 博物館や科学館とは違った視点から科学を見る
- ② 科学の本の見せ方を工夫する
- ③ 子どもが楽しめる空間にする

その結果、①として、天体そのものの科学的な事実を説明するのではなく、人類が天体を見て何を思い、想像力を駆使したか、そして好奇心をもっていかに事実を解明していったのかを児童書から読み解くことにした。そこで全体を「太陽の塔」「月の塔」「星々の世界」の3部構成とし、テーマごとに科学の本、世界各国の伝承、創作絵本、文学を展開したのである。特徴としてはサイエンス・フィクションを紹介した点が挙げられる。

②については、「星々の世界」の中で、「天文学の歩み」「現代の天文入門」「宇宙へ飛ぶ・ロケット開発」「宇宙の観測・宇宙の生活」などの章立てで資料を紹介した。1632年刊行のガリレオ著『天文対話』の初版や、アインシュタインの「一般相対性理論の基礎」の論文等も期間を限定して展示した。

③については、子どもが会場で楽しみ、そこで得た知識を後で深めることができることを目指した。そこで、会場を宇宙に見立て、2つの展示塔を太陽の塔、月の



宇宙服の展示

塔と名づけ、塔上部には太陽と太陽系、月の天体写真の装飾（口絵参照）を施し、ロケット模型や宇宙服などを展示してミュージアム全体で宇宙空間を表現した。また、子ども向けに小冊子（口絵参照）を作成した。展示を見終わった子どもが家へ持ち帰って活用できるよう、近くの図書館や

本屋で入手できる資料や関連の資料を紹介し、監修者による科学Q&A、宇宙について学べる機関等のサイト情報を掲載するなど、幅広く利用できる工夫をした。

入場者動向

展示会場である本のミュージアムへの入場者の総数は41,797名、会期中の当館来館者総数約73,000名のおよそ57%が展示会場に足を運んだことになる。傾向としては、平日の来館者はミュージアムに足を運ぶ率が低く、休日や夏休みといった観光シーズンは高い。また、展示関連の行事を開催した日も高くなる傾向が見られた。これは、展示以外の目的があって来館した利用者なのか否かの差でもある。多い日は8割以上の来館者がミュージアムに入室し、少ない時は3割を大幅に割った日もあった。今後、来館者の展示への興味をいかに引き出せるようにするかが課題である。

展示会のアンケートでは334名の回答を得た。入場者のわずか0.8%の意見ではあるが、おおよその傾向は読み解くことができる。過去の展示会のアンケート結果における年齢別割合を見ると小学生の回答率は約15%であるが、大空展では23.4%を占める。子どもが親しむことができるように随所に工夫をこらしたことや、子ども向けの小冊子を配布したことなどによる効果といえよう。

展示会を知ったきっかけについては、来館してはじめてが約40%、続いて上野公園案内板が16%であり、5割以上が展示会の開催を事前に知らなかったことになる。アンケートにも「こんな展示会をやっていることを知らなかった。もっと広報してほしい」といった意見も寄せられた。また、初回来館者は過去に来館したことがある利用者の約2倍となっており、上野公園ならではの特徴が現れている。

展示に対する印象はおおむね良好であった。その中の意見をいくつか紹介したい。

- ・テーマや解説が面白くわかりやすい。
- ・展示方法や装飾がよかった。
- ・宇宙服の展示が面白かった。
- ・いろいろな本があって楽しめた。
- ・天体にまつわる話が世界各国で様々な解釈されていることがわかった。
- ・SF コーナーが面白かった。
- ・展示している本を読みたくなった。

これらは、展示班の狙いどおりの効果が上がったことを示す意見であったが、一方で、展示会の解説書がほしい（今回、展示会図録は作成していない）といった意見や、その場で本に触れることができないことへの不満が多数寄せられた。一部の展示資料については1階の子どものへや等で読むことができるが、毎回寄せられる要望であり、検討する必要がある。展示会終了後には、当館ホームページ上に展示した資料リストを掲載している。また展示会の解説パネルについては、内容をコピーしたいという要望がいくつも寄せられており、今後ホームページで掲載するなどの対応を検討している。

関連催物「星座早見盤を作ろう」

7月22日(日)の午前と午後、2回開催した。対象者は小学生高学年から中学生を想定していたが、思いのほか低学年の子どもの希望が多かった。参加者の子どもたちの半数以上が初めての来館ではあったが、付き添いで参加した保護者の3分の2が当館へ幾度か来たことがあるということから、保護者の関心の高さが窺われた。父親の参加も目立ち、天文分野のイベントの効果があったといえる。参加した



星座早見盤を作ろう

子どもたちに読書傾向を聞いたところ、文学がほとんどであったがイベント自体は面白かったという意見が8割を超えた。展示担当者が意図した、図書館に来る子どもたちに科学に興味を持ってもらうという目的がある程度達成できたといえる。

（活動報告38～41ページを参照）

（「大空を見上げたら」展示班）

展示会

「ゆめいろのパレットⅢー野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」

はじめに

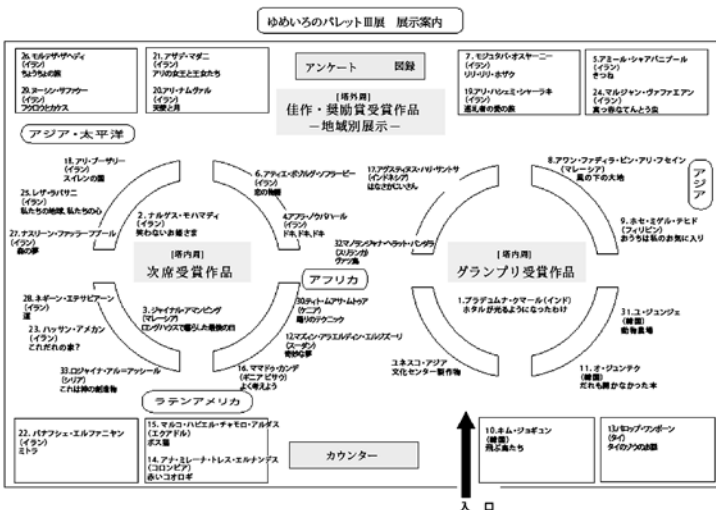
国際子ども図書館では2007年9月22日(土)から2008年1月13日(日)まで3階「本のミュージアム」において、第15回野間国際絵本原画コンクール入賞作全33作品から選んだ69枚の原画と、絵本及び関連書163点を紹介する展示会を財団法人ユネスコ・アジア文化センター（以下、ACCU）との共催で開催した。

この展示会は、普段あまり目にする事のないアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ地域の絵本を紹介する貴重な機会でもある。コンクール入賞者の出身国は14か国であるが、絵本は、入賞者の作品のほか、37か国1地域の挿絵画家の原書や翻訳書を展示した。また、ACCUの活動を紹介する資料及び出版物も展示した。

展示の構成と会場配置

展示塔と各コーナーの展示配置は下図のとおりである。

右塔の内周に大賞受賞者ブラデウムナ・クマール氏の原画を展示した。作品はインドの民俗画であるミティラー画で描かれたものだったので、ミティラー画の紹介資料、同技法で描かれた絵本のほか、ゴント画、ワルリー画で描かれた絵本も展示した。また、多言語国家であるインドの様々な言語で書かれた絵本を紹介した。内周のコーナーの一つを過去の大賞受賞作関連の展示とした。右塔外周は、ACCU



関連の資料のほか、佳作、奨励賞受賞者の国とその周辺の国の絵本を紹介した。

左塔内周に次席入賞者（イラン、マレーシア）の原画を展示し、イラン、イスラエル、カザフスタン、トルコ、ラオス、タイ、ベトナム、コートジボワール、南アフリカ、タンザニアの絵本を展示した。外周には右の展示塔と同じく佳作、奨励賞受賞者の国とその周辺の国の絵本を紹介した。ブラジル、ベネズエラ、メキシコ、キューバ、レバノン、エジプト、ガーナ、ナイジェリア、エチオピア、モーリシャスなどの絵本である。四隅のコーナーにも同様に受賞作品と絵本を展示した。

今回の絵本の展示では、外国語の図書のタイトルは、できるだけそれぞれの言語で表記した。言語は、ACCU 出版物も含めると、ヒンディー語、カンナダ語、タミル語、パシュト語、ダリ語、ペルシャ語、アラビア語、アフリカーンス語、ズールー語、スワヒリ語、ラオス語、ウルドゥー語、スペイン語、ポルトガル語、カタロニア語、ベトナム語、タイ語、韓国語、中国語、ヘブライ語、トルコ語など30を超える言語に及んだ。最近はパソコンにさまざまな言語の文字が入っており、キーボードで手軽に入力できるが、ラオス語のように入っていないものもあり、また、アラビア語やペルシャ語のように右から書く言語では、リストを作成する際に単語間の順序が反転するなどの苦勞もあった。しかし、当館の所蔵する様々な言語の絵本を紹介するよい機会となった。

関連講演会「エジプトの児童文学と公共図書館—エジプトの読書運動—」

関連行事として講演会「エジプトの児童文学と公共図書館—エジプトの読書運動—」



を10月27日(土)に開催した。エジプトでは読書運動が大きな成果をあげ、優れた絵本が出版されている。そこでエジプトの児童作家のエマード・エル=シャフエイ氏(写真)に、自らの体験を踏まえてエジプトの読書運動と最近の児童書出版についてお話しいただいた。台風による荒天であったが、駐日エジプト大使、文化参事官を含めて60人を超える参加があった。

講演は、アラビア語で行われ、児童書や公共図書館に興味のある人ばかりでなく、アラビア語やアラビア語圏に興味のある人、また日本在住のアラビア語圏の人々も来場し、講演後の質疑も活発であった。(活動報告38、41ページを参照)

(「ゆめいろのパレットⅢ」展示班)

講演会「多文化社会における児童書・児童サービス」 ーアルダナ IBBY 会長を迎えてー

2007年7月7日(土)に、パトリシア・アルダナ国際児童図書評議会（IBBY）会長を招へいし、社団法人日本国際児童図書評議会（JBBY）の協力を得て、「多文化社会における児童書・児童サービス」というテーマで、国際子ども図書館主催の講演会を開催した。

講演会は2部構成で行われた。第1部はアルダナ会長が多文化社会における出版のあり方についての講演を、第2部は JBBY 副会長末盛千枝子氏が IBBY 国際理事の経験を中心とした講演を行った。講演参加者は67名にのぼり、質疑応答も盛んに行われ、大変充実した講演会となった。講演の記録は、国際子ども図書館ホームページに掲載している。

また、夕方には皇后陛下のご臨席のもと、長尾真国立国会図書館長主催の「アルダナ国際児童図書評議会会長歓迎の夕べ」が行われた。

第1部「本は世界への窓、自分を映す鏡―何故、多文化出版が重要なのか」

講師：パトリシア・アルダナ（Patricia Aldana）IBBY 会長



パトリシア・アルダナ氏は、中米グアテマラで生まれ、米国で教育を受けた。25歳でカナダに移住し、現在は、トロント在住である。トロントは人口の2分の1が世界各国からの移民であり、多民族国家カナダを象徴する都市である。そのトロントで、アルダナ氏は、1978年に出版社グラウンドウッドブックス（Groundwood Books）を設立し、多文化を扱った多くの優れた児童書を出版し、カナダの児童書出版界を牽引してきた。今回の講演で、アルダナ氏は、文化における主流と少数派の問題、カナダの児童文学に見る多文化出版の歴史的変遷、「世界の窓となる本、鏡となる本」を出版する意義、出版業界の社会的役割、本と子どもを仲介する司書への期待などについて、具体例を挙げながら、丁寧に聴衆に語りかけた。以下、簡単に概要を紹介する。

アルダナ氏は、カナダの児童文学には草創期以降長い間、若干の例外を除いては、多民族社会である現実やその中で生きる少数派を描いた作品が存在せず、また、少数派を描いた作品も多くは白人作家が描いたものであったこと、状況が大きく変化したのは、1970年代の先駆的な出版を経た80年代になってからであったことをまず説明した。状況の変化とは、今まで、自らのアイデンティティーやルーツに基づいた作品を発表できなかった先住民やウクライナ系、日系、中国系カナダ人などが出版状況に抗議の声を上げ、主流派に属する白人の作家が少数派を描くことを「盗用された声」とみなして、それらの作品の信憑性を問う厳しい議論がアメリカを含めた北米の作家や挿絵画家の間で行われるようになったことを指している。この議論はカナダの出版界にも影響を与え、実際に経験者が自らを語る出版物が増えてきたとのことであった。また、アルダナ氏自身は、先住民の物語を出版することに特別な責務を感じると述べており、講演の中では、先住民が自分たちの苦難の時代を描いた印象的な作品を数点紹介した。

アルダナ氏は、カナダの児童文学における少数派の描き方について歴史的に通観した後、自分の理想とする出版物のありかたを、IBBY マカオ大会でメキシコ代表のエリサ・ボニラ・リウス（Elisa Bonilla Rius）氏が述べた「子どもたちは世界への窓となるような本を必要としている。また、彼らは鏡となるような本を必要としている」という言葉を紹介しながら聴衆に提示した。鏡となるような本とは、子どもたちがそこに自分を投影し、様々な異なった世界の中にある自分自身の姿を映し出して自分の価値と尊厳に気づく、そういう役割を果たす本のことであり、世界への窓となる本とは、より広い世界を開いてくれる本を意味している。アルダナ氏は、鏡としての本と窓としての本を、世界の平和と民族間の理解に向けた橋の2本の橋脚にたとえ、この二つの橋脚が強力であってこそ、相互理解という橋を渡ることができるのであり、子どもたちにそのような本を提供するのがそれぞれの国の出版社の責任であると述べた上で、最後に、子どもたちに優れた本を提供するに当たっての司書への期待について語って、内容豊かな講演を締めくくった。

第2部「多文化へのまなざし-IBBY で私が出会った人々」

講師：末盛 千枝子氏（IBBY 副会長、(株)すえもりブックス代表）



末盛千枝子氏は、2002年から4年間、IBBY の国際理事を務め、アルダナ会長とも親しい間柄にある。末盛氏の講演は、2年に1度開催される IBBY 世界大会で出会った世界各国の人々のエピソードを豊富に織り込みながら、貧困や戦火の中で生きる子どもたちにとって、如何に本が心の糧となるかを具体的に語るなど、本への想いと平和への希求に満ちたものであった。

末盛氏は、南アフリカ大会では行く直前に読んだ本の感想を突然会場で話してしまい皆を驚かせてしまったこと、セビリア大会で「私たちはやっと我らのマンデラ大統領といえることができるようになりました」という発言を白人である南アフリカ代表のジェイ・ヒール氏から聞いた時の感動、また、イタリアのボローニャで開かれた IBBY 理事会の際にイラク戦争が始まり、イギリスの国際理事が自分の夫がイラク人であると打ち明けてくれた思い出など、国際理事としての貴重な体験を実感をこめて語った。

特に、2006年の IBBY 大会については多くの言葉を費やした。2004年、日本の教科書問題で反日運動が起こっていた時期に、日本の国際理事として北京での2006年大会開催決定のため中国に赴いた際の出版文化大臣を初めとした中国の人々との気持ちのふれあい、北京からマカオへの直前の会場変更に伴う中国国際児童図書評議会とバーゼルの IBBY 事務局の大車輪の活躍などを詳しく語ったが、微妙な状況の中で IBBY の活動を行う人々に対する思いの感じられる内容であった。

最後に、末盛氏は、南アフリカ大会の最終日に送迎バスに乗り合わせた世界各国の人々とビートルズ、ナット・キング・コールといった昔のポピュラーソングを大合唱したエピソードを紹介した。末盛氏は、世界中から集まった子どもの本に関係する人たちが同じ時代の同じ歌を知っていることの不思議さ、歌いながら感じた「平和ってこういうことかもしれない」という思い、そして、このように大切な思い出を共有していることの重要さは絵本にも通じているものだという認識について語った後で、紹介した本の中の1冊の帯に書かれている「本を愛する人は希望を捨てません」という言葉で講演を終えた。IBBY の活動が、本と子どもを愛する多くの人々の努力の上に成り立っていることを改めて実感した講演であった。

（活動報告39、40ページを参照）

（企画協力課企画広報係）

平成19年度児童サービス連絡会 ー児童サービスの実際と課題ー



国際子ども図書館は、平成19年度より3年連続で、「児童サービス連絡会」と題し、都道府県立図書館の児童サービス実務担当者との連絡会議の場を設けることとした。

第一回目の連絡会を平成19年11月21日(水)の午後1時から4時40分まで、国立国会図書館国際子ども図書館2階研修室において行ったので以下に概要を報告する。

参加館は、児童サービス関連の活発な活動とともに広域的かつ学校図書館等への館種を越えた支援を行っている都道府県立図書館から、地域的な偏りがないよう考慮した結果、次の9館に参加を要請した。

参加館：(館名五十音順)

石川県立図書館、大阪府立中央図書館、岐阜県図書館、群馬県立図書館、東京都立多摩図書館、徳島県立図書館、福岡県立図書館、福島県立図書館、山口県立山口図書館

この会の目的は、以下の4点である。

- ・都道府県立図書館における児童サービス活動の現状及び課題を把握し、情報の共有を図ること。
- ・都道府県立図書館と国際子ども図書館との連携・協力を強化すること。
- ・連絡会での討議内容を公表することにより、全都道府県立図書館の児童サービスに係る図書館活動を支援すること。
- ・国際子ども図書館における子どもの読書活動推進支援計画策定に資すること。

これらの目的を遂げるため、3年で以下の3つのテーマについて討議を行う。

平成19年度テーマ「児童サービスの実際と課題」

(選書、催物、子ども向けホームページ等)

平成20年度テーマ「学校図書館への支援の実際と課題」

(協力貸出し、レファレンス、学校司書等への研修等)
平成21年度テーマ「公共図書館への支援の実際と課題」

(図書館員研修、ボランティア研修、協力レファレンス、
移動展示会、資料選定支援等)

会議に先立ち、今年度のテーマに関して、参加館に対し事前アンケートを実施した。アンケートの主項目は、「児童室の概要」、「選書」、「子ども向け催物」、「各館ホームページの子ども向けページ」、「子どもと本をつなぐ大人へのサービス」、「職員・体制」、「直接児童サービスを行う意義と課題」の7項目である。各館からの回答は、会議資料としてまとめた。このアンケート結果は、国際子ども図書館ホームページ上で公表する予定である。

国立国会図書館国際子ども図書館長のあいさつに引き続き、国際子ども図書館における児童サービスについて報告した。続いて、事前アンケートにより顕著になった、各館の特徴的な事業に対する質疑応答や、都道府県立図書館として共通する課題についての活発な意見交換が行われた。

以下に、その主だったものを取りあげて紹介したい。

<「児童室の概要」より>

ー乳幼児サービスについて

石川県立図書館（以下、石川）：今年4月に、「ブックスタートルーム」において本格的に乳幼児サービスを開始した。今後は、直接サービスだけでなく、市町立図書館やボランティアを支援するためのサービスを充実させたい。

岐阜県図書館（以下、岐阜）：外部委託による託児事業を平成17年度より開始した。週2回、午前の2時間、1人1時間以内で最大6名まで。場所はおはなし室。利用者には好評だが、施設・費用など厳しい部分もある。

ーヤングアダルトサービスについて

東京都立多摩図書館（以下、東京）：青少年サービスは未だ手探り状態。「青少年のための資料」が具体的に存在するわけではないので、選書が課題だ。

福岡県立図書館（以下、福岡）：「子ども図書館」は別館にあり、対象は中学生まで。今年7月に、本館1階新聞室を「青少年と暮らしの交流室」に変更した。青少年向きの図書だけでなく、「暮らし」「仕事」についての資料も併せて置いている。

<「選書」より>

ー現物選書について

東京：「見計らい」で現物選書をしているが、学校図書館向け出版物が入ってこないのが悩み。学校図書館には現物選書をする機会がほとんどなく、学校図書館向けと称する資料に限って質にばらつきがあるのが実情。図書館がそれらの資料の内容を確認し、選書情報を提供する必要がある。

山口県立山口図書館（以下、山口）：自館は現物選書ではないが、主に市町立図書館や学校図書館関係者等に現物選書の機会を提供するため、「新刊児童書研究会」を毎月開催し、1か月間に受け入れた児童書と研究書約300冊を展示している。うち20～30冊をピックアップし、職員が解説を加えている。一方、「新刊児童書出前研究会」では、県内各地に出向いて3か月分の資料を同様に紹介する。司書や学校司書、ボランティア等の参加がある。

福島県立図書館（以下、福島）：当館でも、同様のサービスを行っていきたいと考えている。

<「子ども向け催物」より>

―市区町村立図書館との関係について

福島：おはなし会等の催物は、その成果を市町村に情報提供するように努めている。日程については近隣の図書館と調整している。

山口：行政から、県立が市町村立と同じサービスをするのはどうかと言われる。そこで、おはなし会を研究開発の位置づけにして、実験的に絵本を読んだり、催物の成果を刊行物にまとめて刊行する予定。

<「各館ホームページの子ども向けページ」より>

―東京都立多摩図書館の事例について

東京：「子どもの読書活動推進計画」で予算がついて開設した。デザインは専門業者に依頼し、コンテンツは小学3年生程度を対象とした解題などを作成した。保護者からの「どんな本を読ませたらよいか」というメールによる読書相談には、まずはホームページを案内している。一方、子どもからのメールレファレンスは年間2桁もいかない。内容は郷土について聞かれることがあるので、小平市や杉並区の子ども向けページを参考にしたい。また、子どもにとって本の表紙画像があるのとないのとでは大違いなので、1件毎に出版者に電話・メール・ファックスなどで許諾を取り、掲載している。

<「子どもと本をつなぐ大人へのサービス」より>

―研究室機能について

徳島県立図書館：研究室は専任ではなく児童カウンター員が対応している。主題や内容で絵本を探す人が多いので、目録にキーワードを入力している。

―ボランティア等の研修事業について

福岡：県の助成財団と共催で、県立図書館で実施。また、市町村等の依頼を受けて、講師として普及活動も行っている。学校単位での要望に応えられる人材の養成が課題。ボランティア対象の講座は必要があるが、多くの時間を取られるのが悩みである。

石川：ボランティアの養成講座は、実行委員会を組織し、「子どもゆめ基金」の助成を受けて、昨年度までの5年間行ってきた。読み聞かせ等の基礎研修を地域別に行うことにより、地域での活動が広がってきている。

<「職員・体制」より>

ー職員数について

山口：「子ども読書支援センター」と「子ども資料室」の2枚看板を掲げており、かなりの業務を3名の正規職員で担っている。出張も、私の場合、年間50回に及ぶ。年齢構成は50歳代・40歳代・20歳代で、経験の蓄積が今後の課題。

群馬県立図書館：平成17年度から児童サービス専任の正規職員がやっと1名ついたという状況。

ーボランティアについて

大阪府立中央図書館：経験豊富で質の高いボランティアの協力を得て催物が成り立っている。

福島：担当職員によるおはなし会等の実践は、児童サービスについて学ぶために必要であると考えており、ボランティアは入れない方針である。とはいえ、現在の職員数では大変である。

岐阜：児童サービス担当職員は他業務との兼務。土日におはなし会を持つためにボランティアに頼っている状況である。

<「直接児童サービスを行う意義と課題」より>

東京：「子どもの読書活動推進計画」の後押しがあり、どうにか児童サービスを続けている。しかし都道府県立の児童サービスは、「児童サービスは本来地域が担うものであり、都道府県立は二重サービスを行っている」という指摘にまだ応えられていない。一方で、図書館経営の方法が多様化していくなか、正規職員による児童サービスが行われていない市区町村図書館も増えている。

<まとめ>

各館の児童サービスの実際は、それぞれが置かれている状況、つまり人的資源や経験の蓄積度により様々である。しかしながら、「都道府県立は、市区町村立の児童サービスを支援するものであり、市区町村立を支援するためには、都道府県立自らがまず児童サービスの『現場』にいる必要がある」という認識は、各館の児童サービス担当者に共通したものであった。

「現場主義」とのバランスを図りつつ、都道府県立としての役割を果たすために種々の課題の解決に向け、各館が知恵や情報を寄せ合う場として児童サービス連絡会を有効に機能させる必要がある。

(児童サービス課)

大好きな本に出会おう！ —子どものへや・世界を知るへやの小展示—

「子どものへや」と「世界を知るへや」にはいつも元気いっぱいの子どもたちがやってきて、いろいろな本を手にとっています。でも初めて来た図書館で何を読んでいか迷ってしまい、なかなか本を手にすることができない子どもたちもいます。そんな子どもたちをお手伝いするのが小展示。「子どものへや」と「世界を知るへや」には4つの小展示コーナーがあります。それぞれのへやにある本の中から、季節やテーマに沿った本を取り出して並べたり、本と一緒に折り紙や工作を飾ったりしながら、子どもたちが本と楽しく出会えるきっかけとなるよう工夫しています。

いつもは背が見えるだけの本も、小展示で表紙を見せると、手に取られる機会が多くなります。小展示の本を選ぶ際には幅広い年齢に興味を持ってもらえるよう心がけます。展示の仕方も本そのものを並べるほかに、詩の一篇を色紙に書き出して紹介し、それが載っている本と一緒に知らせて本と結びつけるようにもしています。また「世界を知るへや」では、いろいろな切り口から「国際理解」に役立つ本を並べたり、当館3階「本のミュージアム」で開催中の企画展示会の関連展示を行ったりもしています。

「子どものへや」には子どもたちが廊下から室内を覗くことができる小窓があります。ここにも本とそれにあった飾りつけを行い、子どもたちの興味をひいています。当館は約100年前の建物を改修して利用していますが、この小窓は建築当時、明かり取りとして設けられました。今ではこの窓は子どもたちと本を結ぶ窓として活躍しています。

さて「子どものへや」では2007年の夏から「どの本が好き？」というアンケートを始めました。「子どものへやにある本で、近くの図書館などでまた読んでみたいと思った本があれば書いてください」というのですが、これには、小展示など表紙を見せて紹介した本が高い割合で記入されています。へやの本は貸し出すことはできませんが、小展示はここで知った本を最寄りの図書館で読むきっかけにもなっているのです。

小展示の具体的なテーマは本誌の活動報告（p.42、43）に掲載しています。また小展示の期間中には展示本のリストを配布し、当館のホームページでは過去の展示を含めたリストも掲載しています。

(<http://www.kodomo.go.jp/childroom/notice/month.html>)

ぜひ小展示をご覧になって大好きな1冊を見つけてみてください。

(児童サービス課副主査 石川 真理子)

児童文学連続講座「絵本の愉しみーアメリカ絵本の展開ー」

全国の児童サービスに従事する図書館員の専門性の向上と幅広い知識の涵養に資するため、2007年10月15日(月)から17日(水)までの3日間、国際子ども図書館が広く収集してきた内外の児童書及び関連書を活用した児童文学連続講座「絵本の愉しみーアメリカ絵本の展開ー」を開催した。国立国会図書館客員調査員で立教大学名誉教授の吉田新一氏を監修者に、アメリカ絵本に造詣の深い研究者と当館職員が講義を行った。全国19都道府県の公共・学校・専門図書館等から60名、国立国会図書館東京本館職員を含む館内職員延べ121名が参加した。

<講義内容>



吉田講師による講義

■1日目(10月15日)

「草創期(ワンダ・ガグ以前)」

(吉田新一 国立国会図書館客員調査員、
立教大学名誉教授)

19世紀前半、ムーアの詩にボイドが絵をつけた *A Visit from St. Nicholas*、マザーグースの唄をパラフレーズしたホーマーの *The Eventful History of Three Little Mice and How They Become Blind* など、

素朴な子ども向けの絵本が生まれ始める。児童図書館活動が盛んになる19世紀後半は、『銀のうでのオットー』など中世騎士物語を題材にしたパイル、『オズの魔法使い』で知られるデズロー、『けしつぶクッキー』のピーターシャム夫妻などがアメリカ絵本の黎明期をリードした。

「開花期(第二次世界大戦末まで)」(吉田新一)

児童書の名編集者が登場し、絵本は黄金時代を迎えた。ガグは『100まんびきのねこ』で従来にはないレイアウトに工夫を凝らした。アメリカ絵本の明るいユーモアと風刺性は、リアリズムとほら話を組み合わせたところから生まれたものであり、『100まんびきのねこ』がその原点である。マックロスキーやドーハーティの作品もその好例である。時間・歴史をわかりやすく絵本にしたバートンも紹介した。

「国際子ども図書館『絵本ギャラリー』の紹介」

(小沼里子 国際子ども図書館企画協力課企画広報係長)

国際子ども図書館の電子展示会として2000年以降、順次制作・公開している絵本ギャラリーの「絵本は舞台」から「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」までの6つのコンテンツについて、アメリカ絵本の作家・作品も実例として挙げながら紹介した。

■ 2 日目 (10月16日)

「発展期 (第二次世界大戦後)」(三宅興子 梅花女子大学名誉教授)

1940年代から50年代は、エネルギーな黄金時代を引継ぎながら、子どもの研究が進んで絵本に内面性が加わった時代である。

レオーニ、ウンゲラー、デュボアザン、ハード、八島太郎などの作品から作家の特徴を解説するとともに、識字教育にも使われたドクター・スースの絵本、ディズニー絵本やゴールデン・ブックスなど大衆的なアメリカ児童文化にも言及した。

「最盛期 (モーリス・センダック その1)」(吉田新一)

センダックは自分の内なる子どもにこだわり続け、深層心理的色彩の濃い作品で絵本界に衝撃を与えた。先人の芸を取り込むそのパスティーシュの才や、尊敬する先人へのオマージュの表現、短いテキストから豊かな世界をつむぎだす絵の力を、『かるい姫』や『あなはほるものおっこちるところ』をはじめ多数の作品を例にあげて解説した。

「参考図書を紹介—アメリカの絵本を知るためのブックリスト—」

(福士輝美 国際子ども図書館資料情報課長)

アメリカで刊行された絵本を調べるためのさまざまな書誌を紹介した。アメリカ文化を特徴づける多文化をテーマとする絵本の書誌やインターネット上の絵本のブックリストも取り上げた。

■ 3 日目 (10月17日)

「最盛期 (モーリス・センダック その2)」(灰島かり 翻訳家)

センダックの絵本には生命の根源に触れるような作用がある。代表作である三部作から『かいじゅうたちのいるところ』と『まどのそとのそのまたむこう』の2冊を取り上げ、それぞれの構造を探ることで子どもたちをひきつける謎に迫った。舞台芸術家としてセンダックが関わったオペラやバレエもビデオで紹介した。

「非日常の世界—物語る手法のからくり—」(藤本朝巳 フェリス女学院大学教授)

日本の絵巻『信貴山縁起』や西洋の宗教画を例に取り、絵による物語の展開手法を解説した後、ウィーズナーやスモールの文字なし絵本の手法を紹介した。さらに、ヤングのカラージュ絵本、騙し絵の手法を駆使したオールズバークなど、現代の絵本作家たちの独特な手法を解説した。

講義では、19世紀から現代まで、各時代の傾向を概観しつつ、代表的な絵本作家の作品と特徴を、実際の資料を見せながら紹介した。選択科目として館内見学と、講義で紹介した当館所蔵資料の閲覧を設けた。また、監修者吉田新一氏をアドバイザーとする意見交換会においては、アメリカ絵本の歴史と作品の背景について系統立って学ぶことができ、蔵書構成や読み聞かせなどの業務に生かしていきたい旨の感想・意見が多く寄せられた。
(企画協力課協力係)

電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテンツ 「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」

国際子ども図書館では、2007年5月5日、電子展示会「絵本ギャラリー」*に新たなコンテンツ「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」を追加した。また、18世紀後半から19世紀の欧米の挿絵本を紹介する画像データベース「子どもの本 イメージの伝承」に、新たにランドルフ・コルデコットとケイト・グリーナウェイの作品を追加した。

*「絵本ギャラリー」(<http://www.kodomo.go.jp/gallery/>)は、絵本の発祥から20世紀までの発展の流れを、内外の貴重な絵本の画像に音声を加えインターネット上で紹介する電子展示会であり、現在6点のコンテンツを提供している。

モダニズムの絵本 日常の中の芸術

1920年初頭から30年代にかけて、世界各地で同時に起こった新しい芸術運動が表現されている絵本10作品を掲載したものである。音声による日本語・英語の朗読および解説と、その時代に合わせた音楽をつけて紹介している。ロシア語の朗読や、しかけを動かして遊ぶことのできるしかけ絵本もある。



『イワン・イワーヌイチ・サモワール』



『コルデコットのスケッチブック』

子どもの本 イメージの伝承

今回新たに、ランドルフ・コルデコットの4作品（『コルデコットのスケッチブック』等）とケイト・グリーナウェイの3作品（『子どもの一日』等）を追加した。この結果、36作品の絵本画像約2,200枚のデータベースとなった。作品名、出版年、画家名、キーワードから絵本を検索できる。

（企画協力課企画広報係）

ポーランドの児童書事情

小原 雅俊

ミハウ・ザヨンツ『子どもと青少年のための本に関するレポート』

1998年、クラクフで開催された国際スラヴィスト会議の帰路、ワルシャワで本屋巡りをしたとき、書店に並ぶ児童書の貧弱なことに驚き、このとき購入したフランス語からの低学年向けの絵本の翻訳が劣悪で、またイラストが本文の記述と違っていたり、絵そのものの構図が変だったりして唖然とさせられた記憶がある。体制転換後、本は出版社がリュックサックに詰めて書店に卸して歩くものなので、一旦店頭から消えたら二度と入手できない、と冗談交じりに語られていたものだが、あれからほぼ10年、インターネットで検索する限り、出版市場もかなり整ってきたようだ。ただ、子ども向けの本の流通はインターネットを通じた注文や予約出版などの方が主で、書店で目当ての本を探すのはむずかしいようでもある。この原稿を書く上でようやく入手できた最新のポーランド児童書事情を手際よくまとめたミハウ・ザヨンツ著の『子どもと青少年のための本に関するレポート』(Michał Zając, *Raport o książce dla dzieci i młodzieży. Biblioteka Analiz, Warszawa 2006*)によれば、現在、児童書を出している出版社は老舗のナシャ・クシェンガルニヤ(Nasza Księgarnia)を除いて、1990年代初めから2000年初頭にかけて誕生したものばかりで、出版部数も決して多くはない。たとえば1989年に子ども向けの本を中心とした有限会社として誕生し、2002年から株式会社として活動しているムゼア・エスア社(Wydawnictwo Muzea SA)を例にとると、90年代に外国の版權を獲得して出した教育書が83万部を売ったが、その後この市場から撤退し、2000年以後、再び年長の子どもの向けの翻訳小説とコミックスの出版を開始している。「0歳から100歳までの子どもと青少年向けの本を出版している」エゾプ社(Ezop)は2001年の創立以来の出版点数は11点、総部数3万8千部(平均部数3,000部)だそうである。また1992年設立でポーランド人の著者の本の出版を専門にしているアカピト・プレス社(Akapit Press)はどの作品も2万部近く売れるマウゴジャタ・ムシエロヴィチ(Małgorzata Musierowicz)の本(毎年2、3回、各作品が5,000部増刷されている)を2006年段階で14点出版して、順調な業績を上げている。そのおかげもあってか、他の出版社ではなかなか出ないポーランド児童文学の“古典”と言ってよいイレナ・ユルギエヴィチヨヴァ(Irena Jurgiewiczowa)や古い世代の作家ハリナ・オジョゴフスカ(Halina Ożogowska)の作品、一世代前のポーランド人にとって忘れがたいウイットとユーモアに富んだポーランド語学習にとってうってつけの短文を書いてきたステファニヤ・グロジェンスカ(Stefania Grodzińska)らの本も出版している。因みに編集部員は5人だそうである。

以上から想像できるように、近年のポーランドの児童書の実情を把握するのは簡

単ではなかった。その点で前述の『レポート』の出版は筆者の推測を確認させてくれる恰好の出版物であった。

この『レポート』は、現在ポーランドで出ている子ども向けの本の圧倒的部分が外国から版權を買って出版されたものであることから来る否定面を指摘している。イラストが豊富に入った本は高価になるため、自国の作家の新しい本はなかなか出ない、一方出版社は版權を出来るだけ安く手に入れようとするため、いきおい、あまり芸術的センスがあるとは思えない本を買うことになる、と嘆いている。もはや60年代に全盛期を誇ったポーランド・イラスト派の面影はなく、ヴィルコン（Wilkoń）やグラビヤンスキ（Grabiański）、スタンヌイ（Stanny）といったかつての名立たる芸術家は過去のものとなった、という。名の知られたポーランドのグラフィック・アーティストの作品が外国で出版された本を飾ることが多いことは、体制転換後に日本で開かれた「東欧の絵本展」に出品された作品のほとんどが外国の本に付けられた絵であるのに驚いた経験からも推測できる。一方、若い芸術家たちは、ポーランドの出版社からの注文を期待できずに嫌気が差し、印刷を期待しないで「^{ひきだし}抽斗用」に描いている状態はいまだ続いているようである。実際、筆者の友人・知人の画家やデザイナーたちの意気消沈ぶりは、活気に満ちていた60年代、70年代とはあまりに対照的である。



書評誌『新刊書』

ところで、国際子ども図書館のための選書リスト作りにあたって拠りどころにしたのはインターネットと昔からある月刊書評誌『新刊書』（*Nowe Książki*）の「子ども用」と「青少年用」の欄の新刊書紹介・批評記事であった（この雑誌は東京大学文学部に所蔵されており、閲覧する上で文学部スラヴ文学研究室の長谷見一雄教授にお世話になった）。児童図書専門の書評誌として最年少児童向けの文学に関する記事を10年余り前から掲載している季刊誌『ガリヴァー』（*Guliwer*）があることは分かっていたが、入手できなかった。発行部数2,000部で、主に図書館関係者に行き渡っているようである。もっとも『新刊書』の発行部数もごくわずかで、その影響範囲は限定されて

おり、『レポート』もこの点に触れて、今のポーランドには出版社が自ら制作した本を新聞・雑誌の書評を通して宣伝する可能性がない、大発行部数を持つ女性誌や政治・社会週刊誌を通じて子どものための本に関心を持ってもらおうという試みも今のところ特に成果を挙げていない、と述べている。

ポーランドの読書推進キャンペーン

ただ、つい最近、この点で興味深いのは、私が予約購読しているポーランドで最

も権威ある政治・社会・文化週刊誌『政治』(*Polityka*)が、「ポーランド中が子どもたちに読んであげる」(CAŁA POLSKA CZYTA DZIECIOM)というキャンペーンの活動として、「子どもと両親と祖父母のための本のコレクション」23巻の予約を開始するに当たり、リンドグレーンの2つの作品『エーミールと大どろぼう』と『ロッタちゃんのひっこし』を収めた第1巻を付録につけていることである(2007年12月15日号)。この「子どもと両親と祖父母のための本のコレクション」は、『政治』が出版を引き受け、ポーランド・ラジオとポーランド・テレビが後援しているものだが、週刊誌の予約購読者全員にハードカバーの本を1冊プレゼントしたのには驚かされる。予告によるとこのコレクションにはケストナーの『五月三十五日』やエンデの『モモ』などの外国の作品のほか、ケルンの『すばらしいフェルディナンド』、オッセンドフスキ(Ferdynand Antoni Ossendowski)の『象のビララ』(*Słoń Birara*)、マコヴィエツキ(Witold Makowiecki)の『ディオッソス』(*Diossos*)、カミンスカ(Anna Kamińska)の『本の中の本』(*Książka nad książkami*)と『ポーランド人作者の詩による童話』(*Bajki wierszem polskich autorów*)が含まれ、宣伝文句はさらに、残りの巻には何冊かの意外な本が入っていると謳っている。

『レポート』の著者もポーランドの児童図書市場の分析の中で、この面での近年の最も重要な現象は疑いもなくこの「ABC21 基金」(FUNDACJA ABCXXI)が提唱し、2001年から実施されている「ポーランド中が子どもたちに読んであげる」キャンペーンだと述べ、基金が最もよく知られたメディアに未成年者の読書に対する関心を抱かせた事実を驚きを表明している。インターネットで調べてみると今現在、運動には、先に挙げた『政治』誌、ポーランド・テレビ、ポーランド・ラジオのほかにポーランド最大の日刊紙『選挙新聞』(*Gazeta Wyborcza*)やカトリック系週刊誌『ティゴドニク・ポフシェフヌイ』(*Tygodnik Powszechny*)など多くの後援者がついている。

インターネットの「ABC21 基金」のホームページによると、1998年に設立されたこの基金の目的は、「啓蒙・教育・組織・プロモーション・ロビー活動を通じて子どもと青少年の感情的——心理的、知的、道徳的——健全さを支援すること」で、1999年に旧社会主義国の8つの国の代表が参加してワルシャワで開催された国際会議「どのように子どもを愛すればよいか——心理学の新しい発見」が基金最初の企画であり、どうやら児童心理学の専門家たちの中から生まれた運動のようである。2005年にはメディア・ロジナ社(Media Rodzina)と協力して、「図書館にハリー・ポッターを」という運動を展開し、著者と訳者に印税を、出版社に利益を辞退してもらって全巻・全部数を学校図書館と公共図書館に配る運動を行っている。

「ポーランド中が子どもたちに読んであげる」キャンペーンは「子どもの感情の発達にとって子どもに本を読んであげること、また子どもに毎日本を読んであげる習慣を大人が身につけることが大きな意味を持つことを社会に啓蒙する」ことを目

的としている。「子どもに声に出して本を読んであげるとは言葉と考えることを教え、記憶力と想像力を発達させ、知識と道徳的態度の手本を伝え、自己評価を強化なものにする」という学者や実践家の考えに基づくものであった。「子どもたちに読んであげよう、孫たちに読んであげよう」、「少なくとも一日20分読んであげよう。毎日!」というキャッチフレーズを付している。そのために2003年には新プログラム「読む学校」と「読む幼稚園クラブ」を開始し、現在までに全国の1,300以上の学校と約1,300の幼稚園が参加しているそうである。

「黄金リスト」

「ABC21 基金」はまた、親や教師が本を選ぶ上での手助けをするために、子どもに声に出して読んであげるための本の選択基準および最も推奨する書名の「黄金リスト」なるものを作成していて、今回の国際子ども図書館用の選書リスト作成に当たってこの「黄金リスト」を大いに参考にさせてもらったが、これは基金のメンバーが選んだ書名をホームページに掲載し、子どもたちがそれぞれの本にどう反応したか、どれを気に入ったか、どれに興味を示さなかったかを読者から指摘してもらい、また読者からも新しい本を推薦してもらって決めているようで、一度リストに載ったからといってずっとそのまま残るわけではないそうである。たとえば最初の頃の「黄金リスト」には0～4歳児用に5人の著者の本が挙がっていたのが、現在は14人（外国人7人、ポーランド人7人）になっており、5人のうち1人は脱落した。外国のものではリンドグレーンの『ロッタちゃんのひっこし』、ブルジョワ、クラークのフランクリン・シリーズ、マクブラットニイの『どんなにきみがすきだかあててごらん』、モースト、ルードルフの『みんなぼくのもの!』などが、一方ポーランド人の作品では、戦前から戦後にかけて活躍したポーランドの子どもなら誰でも暗唱していると言われる多くの詩を残したブジェフファの『詩と童話』（*Wiersze i bajki*）とトゥヴィムの『子どものための詩』（*Wiersze dla dzieci*）、戦後児童文学の中心的担い手の1人だったパプジンスカ（Joanna Papuzińska）の『子どものための眠れる詩』（*Śpiące wierszyki*）などが挙げられている。

4歳児以上用のリストは詳しくは「黄金リスト」のホームページ（<http://www.calapolskaczytadzieciom.pl/nowa/index.php?page=kp&forceme=1#>; ここから *Książki polecane* に入る）を参照していただくとして、ここでは主に日本でもよく知られている作品のみ紹介しておこう。4～6歳児用——アンデルセンの『童話』、コッローディの『ピノキオ』、リンドグレーンの『長くつ下のピッピ』シリーズ、ロフティンクの「ドリトル先生」シリーズなど。ポーランド人では戦前の人気作で戦後スターリン時代には発禁にされながら、雪解け後復活した伝説的なマクシンスキの『愚か者の子山羊の冒険』（*Przygody Koziołka Matołka*）、近年最も読まれている児童文学作家ムシェロヴィチなどである。6～8歳児用——バーネットの『小公女』、ヤンソンのムーミン・シリーズ、リンドグレーンの『やかまし村の子ども

たち』と『ミオよわたしのミオ』など6点、ポーランド人のものは再びブジェフファおよびケルンの『詩集』など7点。8～10歳児用——バーネットの『秘密の花園』、キプリングの『ジャングル・ブック』、モンゴメリの『赤毛のアン』、マーク・トウェインの『トム・ソーヤーの冒険』と『王子と乞食』など10点、ポーランド人のものはマクスィンスキの『7年生の悪魔』(*Szatan z siódmej klasy*) ほか2点のみ。10～12歳児用——ポーランドのものは4点のみで、邦訳があるムシエロヴィチの『ノエルカ』がここに挙げられている。外国ものではディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』と『クリスマス・キャロル』、サン・テグジュペリの『星の王子さま』など10点。12～14歳児用は9点挙がっているが、1点を除いてすべて外国のもので、ドイルの『バスカーヴィル家の犬』やベルヌの『神秘の島』など。このレベル以上には平易な学術書が3～4冊ずつ加えられている。14～16歳児用——ブールの『戦場にかける橋』、アンネ・フランクの『アンネの日記』、ユーゴーの『レ・ミゼラブル』など9点、ポーランド人のものでは現代の哲学者コワコフスキの『ライオニア国物語：大人も子どもも楽しめる13のおとぎ話』(邦訳あり)とその他の童話、19世紀ノーベル賞受賞作家のプルス(*Bolesław Prus*)の『ファラオ』(*Faraon*)、カトリック詩人トファルドフスキ神父(*Jan Twardowski*)の『詩集』(*Wiersze*)の4点。16歳以上用——外国のものはオーウェルの『動物農場』など4点、ポーランド人のものは3点で戦後最大の詩人の1人ヘルベルトとつい最近世界した著名なルボルタージュ作家カプシチンスキの『皇帝ハイレ・セラシエ』(邦訳あり)と『帝国』(*Imperium*)、数年前ノーベル賞を受賞した詩人シンボルスカの『詩集』(*Wiersze*)が挙がり、5点ある学術書には子どもに読んでやる前にまず自ら読んで一部を選ぶこと、という注付きでフロムの『愛するということ』が入っており、ポーランドのものではコワコフスキの本が取り上げられている。

最後に、国際子ども図書館の選書リスト作成に当たって参考にさせてもらったものに、図書館と協力して本への関心を掻き立てようとするどうやら出版市場拡大の運動らしい「子どもと青少年のための本の規範」(*Kanon Książek dla Dzieci i Młodzieży*)というプロモーション・プログラム(国立図書館ほか多くの公共・学校・教育図書館が協力して、読者の投票によって毎年、本の選定を行っている。このプログラムでは本文だけでなく、イラストと装丁についても選定図書を決めている。よく見ると選定された多くの本が「ポーランド中が子どもたちに読んであげる」の「黄金リスト」と重なっていることが分かる)や国際児童図書評議会(*IBBY*)のポーランド・セクション賞の受賞作品(本文の部門とイラスト・印刷部門の賞がある)がある。またポーランドで最も歴史があり、体制転換後も児童書専門出版社でおそらく唯一生き延びたナシヤ・クシェンガルニヤの「80年間のベストセラー」や毎年恒例の文化大臣賞などの受賞作品も極力取り上げた。

(こはら まさとし 東京外国語大学名誉教授)

オランダ・ベルギーの児童書

野坂 悦子

《嬉しい発見》

2004年と2005年の二回にわたり、私は国際子ども図書館の児童書ウォントリスト作成にたずさわることになり、オランダとベルギーを担当した。その作業にとりかかるまえに、所蔵本を見せていただき、その段階で「現地に行かなければ絶対に読めない」と思っていた本の数々に出合った。長年、ヨーロッパと日本のあいだを行き来しながら、紹介に値するオランダ語の本を探してきた私にとって、びっくりするほど嬉しい発見だった。たとえば、オランダを代表する児童文学者のひとり、パウル・ビーヘルは、『他界』（*Andereland*, 1989）という作品を書いている。中世の修道士の伝説「聖ブランデンの航海」を下敷きにしたこの『他界』が、国際子ども図書館には所蔵されていた。オランダ語圏の児童書（ヤングアダルト [以下、YA] も含む）のなかで、一年に1冊だけ選ばれるワウテルチェ・ピーテルセ賞にかがやいた物語であり、ビーヘルの翻訳を何点か邦訳してきた私にとって、どうしても読みたかった本だ。

こうして計6か月間、所蔵本も参考にさせていただきながら、ウェブサイトを検索し、児童文学、絵本、研究書などの情報を集めていった。

《さまざまな賞や研究機関》

日本ではあまり知られていないが、オランダはディック・ブルーナをはじめ、豊かな児童文学の伝統を持つ国である。漫画や再版分を除き、現在、年間約3,000点の児童書が出版されているという。そのなかで良い本を見つけていくには、現地の評価の集約としてさまざまな賞を手がかりにするのが、一番の近道であり、収集がすでに進んでいたのも、本国、ないしは国際的な場で賞を受けた本が多かった。

手がかりのひとつが、「金の石筆賞」「金の画筆賞」である。オランダ語圏で出版されたもっとも優れた本に対して、年に一度贈られる賞であり、この他に「銀」の石筆賞と画筆賞が数点ずつ選ばれ、佳作として「旗と吹流し賞」が続く。

金の石筆賞には50年以上の、画筆賞にも25年の歴史がある。主催は、「オランダ図書共同宣伝機構」（CPNB）一書籍販売業と出版社、公共図書館が構成する団体一だ。数年前からこの団体により、YA 書を対象にした「金のキス賞」も創設され、その後12歳から16歳までが参加する「YA 審査団」も組織された。子どもたちによる本の人気投票は、オランダに限ったものではなく、日本にも子ども読者が選ぶ「日本絵本賞読者賞（山田養蜂場賞）」などがある。とはいえ、読書離れの著しい「YA」を取りこもうとしたところが、オランダらしい工夫かもしれない。

2007年の新しい動きとしては、P.C.ホーフト財団による「マックス・ベルジュイス賞」の創設があげられる。これは、ある意味ではブルーナ以上に戦後のオラン

ダ絵本界を切り拓き、2004年に国際アンデルセン賞画家賞を得たベルジュイスを記念して創られた賞だ。第一回受賞者には、50年以上にわたって活躍してきたマンス・ポストが選ばれた。オランダ児童書が、戦後急速にヨーロッパでの評価を高めていったのは、素晴らしい挿絵（イラストレーション）の伝統を持つからであり、マンス・ポストはその挿絵の世界で活躍してきた画家である。児童書に絵を描く画家の業績全体を評価する「マックス・ベルジュイス賞」は、作家に比べて光が当たらなかった画家たちの地位を向上するうえで、待望されていた賞なのだろう。児童書作家の功績全体を評価する賞には「テオ・タイセン賞」があり、こちらは45年の歴史を持つ。第一回目の受賞者は、後に国際アンデルセン賞作家賞を受けるアニー・M. G. シュミットだった。

オランダの本を選ぶうえでは、「オランダ文学制作翻訳基金」（NLPVF）から発信される情報と、ボローニャ国際児童図書展で得られる各出版社からの新刊情報も役に立った。「子どもの本の博物館」本と青少年部門の研究者、リアン・ファン・デ・サンデさんにもいろいろご助言をいただいた。

ベルギーの選書には、「国立児童文学センター（NCJ）/ヴィラ・カーケルボント」とのコンタクトが大変役に立った。1976年より本の収集をはじめた同センターは、IBBY フランドル支部の機能も持ち、ベルギー・オランダ語圏児童文学全体の質の向上をめざしている。さらに「フランドル文学基金」（VFL）や、「読書財団」のホームページも利用させていただいた。オランダの金の石筆賞にあたる「本のライオン賞」、画筆賞にあたる「本のくじゃく賞」の来歴も追い、良書をピックアップしていった。

こうして選んだタイトルが入手可能かどうか確認する段階で、オランダの場合は「ボル」（BOL）、ベルギーの場合は「ブッケンバンク」というネット書店の検索システムを利用した。作業しながらわかってきたのは、どちらの国も、新刊の寿命が大変短いという残念な事実だ。初版部数は平均3,000部だが、賞を取った作品でも、多くは数年で書店から消えてしまう。いっぽうで長らく再版未定だった作品が、体裁を変え、分厚い合本として出ることもある。

《オランダとベルギーの言語》

ここでオランダとベルギーで使われている言語について、少し説明させて頂きたい。オランダの人口は約1,600万人。ベルギーの人口は約1,000万人で、そのうちオランダ語を話す人口が600万人程度だと言われる。ベルギー北部のオランダ語（フラームス）は、フランス語風に「フラマン」、英語風に「フレミッシュ」と呼ばれることも多く、区別されていた経緯はあるが、ひとつのオランダ語を創ろうとする機運の高まりをうけ、1980年にオランダとベルギーのあいだで「タールウニ」

（Taalunie）という組織ができた。現在では、かつての植民地スリナムも加わった三か国のあいだで、オランダ語の学習や文学の普及のため、共通の言語方針が採られている。方言程度の違いを調整し、統一的な言語をめざす働きかけには、良い

部分と、切り捨てられていく部分の両面があるものの、グローバル化の波のなかで、オランダ語が生きのびるためには欠かせない戦略だといえる。

上記三か国のほか、フランス北部、オランダ領アンティル諸島、アルバ島に住む約2,300万人が、世界のなかでこの言葉話しているのも、オランダ語は決して少数言語ではない。しかし、なぜか日本の大学教育の中でオランダ語は冷遇され、オランダ語－日本語の通訳・翻訳者の数は、今もさほど増えていないのが実情である。

なお、ベルギー南部とブリュッセル特別区ではフランス語（ワロン）が用いられ、ベルギーの一部ではドイツ語も用いられる。オランダでも北部のフリースラント地方では、英語に近いフリジア語が公用語のひとつに使われている。バランスをとるために、オランダの選書にはフリジア語の児童書を、ベルギーの選書には代表的なベルギー・フランス語圏の児童書をも加えることにした。

《児童書出版のバランス》

ところで私がオランダに住んでいた1980年代には、児童書の流通面でも評価面でも、オランダとベルギーのあいだに「壁」を感じるが多かった。オランダの本をベルギーの書店で見つけることはあっても、その逆はあまりなかった。

この二つの国は周知の通り、かつてはひとつのネーデルラントとして、ハプスブルク家に支配されていた。プロテスタントが多く住む北部ネーデルラントが17世紀初頭に独立を果たし、オランダという国を形作る。19世紀になってから国として独立したベルギーは、児童書の発達という面でも遅れをとってしまった。

しかし、EU 統合以降、急速にその「壁」がくずれ、最近ではいくつかのベルギーの出版社が、オランダに積極的に進出している。より広い市場をねらった出版物は、前述の「タールウニ」の動きも受けて、スタンダードな言葉で書かれている。この20年間で、ベルギーの児童書は質・量ともに目覚ましい発展を遂げ、今日ではむしろ新しいベルギーの才能が、オランダの出版社に引き抜かれるケースが目立つ。その先駆けが、ベルギーでデビューし、オランダ大手のケリド出版に引き抜かれた作家バルト・ムイヤールトである。英国の児童文学作家エイダ・チェンバースに師事したムイヤールトは、40代前半で、すでに国際アンデルセン賞作家賞の候補にノミネートされる実力派だ。

ほかにもヨーケ・ファン・レーウエンのように、オランダ人の両親のあいだに生まれ、オランダで教育を受けながら、長らくベルギーに住む作家もあり、作家の国籍や活動場所を基準にしたのでは、作品がどちらの国に属するか判断がつかない。余談になるが、2007年4月には、アントワープにあるファン・レーウエンさんの自宅を訪問させていただき、翻訳上の問題について質問する機会を得た。持参したのは、1999年にワウテルチェ・ピーテルセ賞を受けた『訪問の年月』という作品だ。実話をベースに、理由なく投獄された兄さんが解放されるまでの日々を、モロッコに住む少女の視点から書いた物語である。こうした作品の出版背景として、オランダでは5人にひとりが移民であること、中でも非西欧諸国のモロッコ、スリナム、

トルコの移民が圧倒的に多いことも指摘しておきたい。

近年、オランダ・ベルギー両国で、出版社の生き残り競争はいっそう激しさを増している。出版社同士の吸収合併が盛んに行われるいっぽうで、作家や画家の引き抜き合戦も続き、その結果、各出版社の特色が見えにくい時代となった。オランダ国内でも、「前衛的な作品・文学性の高い作品を出すケリド出版」、「子どもの目線に立った本が多いレオボルド出版」、「絵本と低学年、中学年向きの読み物が充実しているプロフスマ出版」というように、かつてはそれぞれ特色が感じられたものだが。もっとも、この三つの出版社についていえば、同じ資本の傘下にあることも関係しているのだろう。

ベルギーでは、独自カラーを持つ出版社が今でも多く、児童書専門の出版社にクラヴィス出版、デ・エーンホールン出版、児童書部門に力を注ぐ総合出版社にラノー出版、ダヴィッドフォonz／インフォドク出版などがある。ボローニャやフランクフルトのブックフェアを利用して、ここ10年、国際共同出版のパートナーを各国に広げているクラヴィス出版は、数年前から東京国際ブックフェアでも自社ブースを出しており、急激に変化していくベルギー児童書出版界を象徴している。

《研究も盛んに》

オランダ語圏には相当数の児童書研究者がおり、それぞれの専門に分かれている。たとえば、私が師事したアンネ・デ・フリース博士は、『良い子どもの本とは何か?』（1989）という研究論文のなかで、児童文学に対する視点を、「教育的立場」と「審美的（文学的）立場」の二つからつぶさに検証し、1880年から今日までの児童文学史にユニークな光を当てた人物である。現代の児童文学について積極的に発言している人物にはヨーケ・リンデルス、トゥルーシェ・フローラント＝ロブ、トイン・ドイクス、アウケ・ホルトロフ、ブレヒエ・ボーンストラ、そして大人の本の書評家としても名高いケース・フェンスらがいる。

専門書や研究書も1980年代後半から増えてきており、歴史的解説、作家研究などテーマもさまざまだ。ディック・ブルーナ、アニー・M. G. シュミット、パウル・ビーヘルの研究書も何冊が出ており、本国で2003年に出た『かえるでよかったマックス・ベルジュイスの生涯と仕事』（ヨーケ・リンデルス著）も、昨年、邦訳出版することができた。欧州児童書界の未知の部分を伝える、興味深い一冊である。

今回のウォントリスト作成を通して、国際子ども図書館所蔵の『ワンダーランドー子どもの本の世界』という、豪華な図録に出会えたこともうれしかった。これは、2002年10月にロッテルダムで始まった児童書展覧会「ワンダーランドーピーチェ・ベルからハリー・ポッターまで」の図録として出版されたものであり、王立図書館所蔵の希少本が一堂に展示されたのがわかる。この図録を見て、私は児童書への深い関心が一般層にも広がっているのを実感した。なお、1914年に初版が出た『ピーチェ・ベル』は「悪童物」を代表する児童書の古典であり、その第57版を、今回、新たに蔵書に加えることができた。

2006年にベルギーのオランダ語圏で出版されたマリタ・ヴェルミューレン著『線の外に色彩を塗って』は、ベルギーにおけるオランダ語絵本の誕生から、現代絵本作家22名の活躍ぶりまでを取り上げたものである。「フランドル文学財団」の協力を得て上梓されたこの恵まれた本を、ボローニャ国際児童図書展に集まった各国の出版社は、羨望のまなざしで見ていたという。国際子ども図書館では英語版（*Colouring Outside the Lines*）も所蔵しているので、関心のある方はぜひ手にとって見ていただきたい。

2007年のボローニャ国際児童図書展では、ベルギー・フランス語圏（ワロン地方とブリュッセル特別区を含む）がゲスト国に選ばれ、絵本作家40名の原画を展示した。2000年に没したガブリエル・ヴァンサン、アン・ブルイヤール、キティ・クローザー、クロード・K. デュボワ、ジョス・ゴファンなど世界的に活躍している画家が多く、オランダ語圏と並ぶ活力があることを示していた。たとえばデンマーク人の母を持ち、フランスに住み、ブリュッセルの出版社から本を出すブルイヤールは、国境を越えて生活と仕事を持つヨーロッパ絵本作家の典型例だ。こうした絵本作家たちの本を出しているのは、ブリュッセルが拠点のバステル／レコール・デ・ロワジール出版、カステルマン出版、ナミュールのミジャージェ出版などであり、その販路は当然ながら隣接するフランスへと広がっている。

ベルギーではもともとフランス語文化が優位だったため、フランス語による文学が先に開花した。たとえば1908年に『青い鳥』をフランス語で書き下ろしたモーリス・メーテルリンクは、長年パリやニースに住んでいたが、ベルギー出身のノーベル文学賞作家である。オランダ語圏で児童文学が開花したのは1950年代だといわれるが、以後急成長していく。

そんなベルギーを特色づけるものに「漫画」がある。エルジェの「タンタン」シリーズ（フランス語）が始まったのは1930年代だが、オランダ語圏でウィリー・ヴァンデルステーンによる「ススケとウィスケ」シリーズ（オランダ語）が始まったのは1945年だった。「ススケとウィスケ」は、日本でこそ知られていないが、「タンタン」同様、熱烈なファンによって今も読みつがれている。

最後に、電子化の例として「オランダ文学デジタルライブラリー」（dbnl）に触れておきたい。中世から現代までの代表的な古典や児童文学作品が、日本にいてもネットで手軽に読める時代になってきたのは、大変ありがたいことだと思う。

とはいえ、オランダ・ベルギーの児童書が地球からいっぺんに消えたら、うさちゃんも、タンタンもいなくなり、世界はさびしい場所になるだろう。国際子ども図書館のさらに充実した所蔵作品を通して、オランダ・ベルギーの児童書研究が日本でも前進するようにと、切に願っている。

*オランダ児童文学の流れについてまとめた記事には、『こどもとしょかん』第105号（2005年春号）、『日蘭学会会報』通巻116号（平成17年度 No.4）等がある。あわせて参考にしていただければ幸いである。

（のざか えつこ 翻訳家）

ボローニャブックフェアでの出会いから

「やあ、お待たせ」

学問と美食の街、イタリアのボローニャで2007年4月下旬に開催されていた第44回児童書ブックフェア会場の一角に、その方は颯爽と現れました。スロベニアのIBBY支部長にして、同国のリュブリャナ首都図書館の児童書部門の部長も務めておられるヤコブ・J. ケンダ (Jakob J. Kenda) さんです。

「おとといは僕の図書館を訪問してくれてありがとう。僕がその日にボローニャ入りしたばかりに、あちらでは会えなくて悪かったね」

そう言うケンダさんに、私はリュブリャナ首都図書館で聞いたこんな話が印象的だった、と切り出しました。

スロベニアは児童書の翻訳出版市場が小さいため、リュブリャナ首都図書館では、英語等で書かれた海外の絵本を、職員が自ら手作業でスロベニア語に翻訳して、子どもたちに読み聞かせをしています。そうした海外の絵本は、ユーゴスラビアから独立する前の社会主義時代には手に入らなかったけれども、現在はボローニャにある出版社の協力によって入手できるようになったというのです。

そのボローニャで毎年春開かれる世界最大の児童書専門の見本市であるブックフェアでは、北米や西欧はもちろんのこと、東欧やアジア、アフリカ、中南米といった、児童書出版情報の収集が難しい地域の出版社も、数々の真新しい児童書を出展しており、出版社それぞれの熱意や活気が伝わってきました。

世界に向けて各地域の児童書を紹介する情報発信源となっているボローニャが、スロベニアという小さな国に絵本を届ける架け橋にもなっていることを考えると、ボローニャという街の懐の深さが感じられます。

しばらくしてからケンダさんはこう言いました。

「社会主義時代にきちんと方策を講じたことによって、スロベニアの識字率は98パーセントになった。でも、その中には、本の字面を追うことはできても日常生活に必要な読み書きができない人たちが、まだ30パーセントもいる。これからはその問題にも取り組まなくてはならないんだ」

国際的な児童書の見本市で、日本では考えたこともなかったような社会問題に真剣に向き合う図書館員に会えたことに、私は感銘を受けました。

そういえば、ケンダさんは世界的ベストセラーである『ハリー・ポッター』シリーズをスロベニア語に翻訳している方です。今から思えば、ケンダさんのボローニャブックフェア訪問の目的のひとつには、次に翻訳する作品の発掘ということもあったのかもしれない。

ケンダさんやリュブリャナ首都図書館の翻訳活動によって、子どもたちが楽しめる本の選択肢が増え、そのことが何らかの形でスロベニアの機能的識字率の向上につながるかもしれない考えると、今後のそうした翻訳活動を応援したい気持ちになりました。

最後に私と握手してから、ケンダさんは軽やかな足取りでブックフェア会場の雑踏の中へ去って行きました。そのうしろ姿は、やがて社会にはばたく子どもたちの未来を、しっかりと背負っているように見えました。

(資料情報課副主査 藤代 亜紀)

エジプト、イランの児童書出版と児童サービス

酒井 貴美子

標記の調査のため2007年1月22日から2月6日までの約2週間、エジプトとイランに出張した。両国とも15歳未満の人口が総人口の30%半ばを占める国であり、児童書出版も活発である。

1. エジプト

カイロ国際ブックフェア

第39回カイロ国際ブックフェア（2007年1月23日～2月4日開催）では、例年11月に単独で開催される児童書ブックフェアも同時に開催された。展示ブース（口絵参照）では出版社のブースに加えて、子どもの読書推進を進めている政府関係や関連団体機関のブースも出ていた。広い敷地内には美味しい食べ物屋さんもあるし、遊覧用の電気自動車も走り回る。家族連れでも一日楽しめるブックフェアは文字通り本に親しむお祭りである。また、出版取次業が発達していない中東世界ではブックフェアは巨大な本の市でもある。販売ブースでは各出版社が本を所狭しと積み上げて売りさばく。ブックフェアで売られるのは新刊書ばかりではない。戸外のテントでは夜まで開いている古本市も開催されて本を求める人でにぎわう。ヘリオポリス図書館を訪ねたときに「古くなった本はどうするのですか？」と廃棄について質問したとき、「ブックフェアで売る」という答えが返ってきて驚いたが、書籍流通の総合的な市と考えれば納得がいく。中東共同収集プログラム（略称：MECAP）を行っている米国議会図書館カイロ事務所のスタッフも、開催期間中は日参して必要な資料を探すと言っていた。

活気づく児童書出版社

エジプトでは、1991年からムバラク大統領夫人の主導で、文化省、教育省、青少年スポーツ省などをまきこんだ「すべての人に読書を」という読書運動が始まり、図書館の増設、図書館活動の充実、優れた児童書に与えられるスザンヌ・ムバラク賞の創設、各家庭に良書を手軽な値段で頒布する「家庭文庫」活動などが行われている。大手出版社のナフデット社、ダル・エル・シュルーク社、アル・ダル・アル・ミスリア・アル・ルブナニー社、辞書出版で有名で、近年、児童書出版も行っているエリアス社、中堅出版社のモダン・アラブ・センター社、人文社会系一般書の出版社で新たに児童書出版に参入を計画しているダル・キターブ・アラブ・デマシュク社、従来の児童書にあきたらず、学校図書館司書の人たちの欲しい児童書を出版するために創設されたアニス・ビン・マリキ社など7社に話を聞いた。児童書の出版について政府の直接的な出版援助や補助金といったものはないが、読書運動とそ

れに伴う購入が大きな力になっていると各社とも声を揃えていた。学校図書館のさらなる充実などで児童書市場はさらに拡大する傾向にあり、一般書と児童書の出版比率が逆転している社もある。良い本を出せば必ず売れるという自信がどの出版社からも伝わってきた。

多様な児童サービス

ヘリオポリス図書館、未来図書館、ムバラク図書館（口絵参照）、マーディ図書館を訪れた。エジプトの図書館は、本の閲覧・貸出のほか、文化センター的な性格を持つ。児童向けでは、絵画、音楽、陶芸、コンピュータ（口絵参照）、人形劇、演劇、博物館などを訪問する館外活動等のクラスがある。美術などの活動のための部屋も確保されており、担当者が誇らしそうに作品を見せてくれた。子どもたちが本をめぐって討論する読書コンテストもある。図書館対抗、地区対抗のコンテストがあり、優勝するのは名誉なことだそうである。例年、読書運動のフェスティバルもあり、これは各図書館の大きな行事となっている。図書館はまだ増設中であり、ムバラク図書館（ギザ本館）は、自治体、政府と協力しての各地の図書館の増設に忙しそうであった。

2. イラン

児童書出版の周辺

イランは、ここ数年、政府が出版社に対して、税金の免除、用紙の安価な供給、資金貸付などの直接的な補助を行い、出版の振興を図ってきた。しかし、この制度を悪用して、本を1冊だけ出版して税金の免除を受ける「出版社」が出現したり、出版される本の水準が必ずしも高いものではないということもあって、政府はこうした措置の打ち切りを決定している。また出版社が増えても、取次業者がない上に書店の数が少ないため、図書が読者にまで届かないという事情もある。イランの児童書の2004年の出版点数は5,691点で全出版点数の13.7%を占める。人口に占める児童数の割合が高いので、児童書の需要はかなりあるが、政府の出版援助の打ち切りの結果、価格の値上げ、出版の減少が懸念されている。図書館が強力な購入者になりえていないという問題もある。

エジプトと同じくイランでも大手出版社は取次を兼ねる。出版社同士で協力してチェーン書店を作ろうという努力もなされている。イランは多民族国家であり、ペルシャ語から他の言語に訳して出版するということも行われている。ここ10年間で「子どもの本の最もすぐれた出版社」という評価を受けている大手出版社のOFOQ社と、政府系機関の児童及び青少年知的発達研究所（略称：KANON）の出版局に話を聞いたが、出版者の苦労や喜びはどの国でも共通していると感じた。イラン児童作家連盟、児童書挿絵画家協会も訪問したが、児童文学作家、挿絵画家だけで生活していくのはなかなか大変なようである。これはエジプトでも同様

で、話を聞いたエジプト作家連盟の会長も新聞社勤めが本業だった。イランでも児童文学作家は教師や編集者を兼ねている人が多い。児童書挿絵画家協会は所属作家の作品を紹介する英語・ペルシャ語併記の年鑑を出しており、外国の出版社をも視野に入れて活動しているようである。

児童書関連機関の活動

イランの国立図書館では、新たに児童課が新設され、訪問した時には児童室開室準備に大忙しの様子だった。イランの児童書関連機関の活動は非常に活発である。『イラン児童文学史』（全10巻）を刊行し、イラン各地の児童文学研究者のネットワークも持っているイラン児童文学史研究所（口絵参照）、イランで刊行された全児童書の書誌と概要を掲載した年鑑を出しているほか、イラン初の『青少年向け百科事典』（全10巻）を出版し、かつ児童書関連のワークショップ、研修を行っているイラン児童書評議会、内外の児童書や研究書を収集・提供している児童書研究のための KANOON 参考図書館などがある。イラン児童文学史研究所、イラン児童書評議会は、いずれも児童書に接することの難しい子どもたちへの働きかけをも含めた読書推進活動も行っている。KANOON 博物館は同出版局出版の絵本の原画をすべて保存している。出版社で独自に保存している社もあるとのことで原画に対する意識の高さを感じた。

KANOON の活動

KANOON と略称される「児童及び青少年知的発達研究所」は、児童・青少年の芸術的才能、創造性、可能性を伸ばすことを目的に1966年に創設された政府系機関である。その中に教育研究所、芸術創造センター、演劇センター、映画センター、歴史センター、言語研究所、識字センター、出版局など多くの機関を抱え、地方も含めると総職員数は約2万人にのぼる。イランの児童図書館は KANOON 文化部に属し、移動図書館、郵送図書館を含めて650館あまりの図書館が現在、全国で活動している。エジプトの図書館と同じく図書館は閲覧だけでなく、美術、音楽活動クラスなどを開くなど子どもの社会教育センター的な性格を持っている。図書の日録・装備作業は KANOON 本部で行うので司書は読み聞かせなど閲覧奉仕の他、美術などの文化活動のクラスを担当する。テヘラン市内の KANOON21 図書館を訪問した際、子どもたちは美術のクラスでデッサンを行っていた。また、KANOON 本部でも子どものためのさまざまな活動のクラスが開かれていた。イランの美術、映画界で活躍している人には子どもの頃、KANOON のクラスに通った人が多いようで、KANOON の活動は着実に実を結んでいるという印象を受けた。

（さかい きみこ 資料情報課主査）

戦中期「講談社の絵本」の＜子供知識絵本＞

吉田 新一

のっけから筆者自身の話で恐縮だが、昭和6年満州事変の始まった年に私は生まれた。そして、小学校に入る昭和12年が日中戦争の始まった年で、私の子ども時代はびたり15年戦争期と重なっている。ここに考察を試みる「講談社の絵本」は、その間昭和11年12月から17年4月へかけて約5年半、私の5歳から11歳の時に、出版されたもので、私には特に懐かしい絵本である。残念ながら手元の絵本はすべて昭和20年4月の東京大空襲で焼失して、記憶のかなたへ消えてしまっていたが、幸い国際子ども図書館には、その「講談社の絵本」203冊が全冊揃っている。これのお蔭で私の記憶はあざやかに甦ってきた。それらを現在の自分の目で見たところを、ここでご披露しようと思う。

小学校時代の秘蔵絵本

一番懐かしいのは『相撲畫報』（昭和15〔1940〕年5月5日刊、Y12-N03-H222〔当館請求記号 以下同じ〕）である。日中戦のさなかで、テレビなどももちろんない。相撲に夢中になっていた10歳の少年は、ラジオの実況放送にかじりつき、手製の番付表に勝ち負けを記録していた。国技館へは連れて行ってもらったことはないが、この絵本のお蔭で、ラジオの放送は臨場感を持って目に見えていたと思う。名横綱双葉山の全盛期昭和15年の春場所を中心に、大相撲の詳細が27葉ものフルカラー画で描き語られている。テレビの映像で今は詳しく知っているのに、相撲のハイライト場面を記録しているそれらの静止画を見ていると、相撲の感興があらためて掻き立てられる。画家たちは畠野圭右、岡吉枝、富田千秋、飯塚玲児、田中良、米内穂豊、中一彌、伊藤幾久造、梁川剛一、金子茂二、鰐崎英朋。出版された年にもかわらず、相撲一事に徹して編集されているので、天覧試合と力士の皇居参拝で語り始められている点と、国技館内階上の棧敷枠に「國技の精華は銃後の慰安」と書かれた横段幕が見える点が、唯一当時の時代をうかがわせるが、特に国威発揚・戦意高揚といったアジテーションはない。写真によるドライな図解とは異なって、画家が丹念に描いた写実画には、ヒューマンなぬくもりがあっている。

＜づくし＞絵本4冊

「講談社の絵本」にはいわゆる＜子供知識絵本＞が少なからず含まれている。『相撲畫報』もその一つであるが、まず『子供知識花づくし』（昭和14〔1939〕年4月10日刊、Y11-N03-H420）によって、＜子供知識絵本＞の一端を検討してみたい。表紙の見返しに絵本編集局による＜まえがき＞があって、「ならば方は季節のじゅんじょにして」取り上げた「五十あまりの花」は「昔から日本にあるものをえらび」、

ダリア、チューリップなどの西洋花については「またあとから出したい」とある(が、その予定は実現しなかった)。そして編集の意図を、人は「小さいうちから花にしたしで・・・やさしい心、美しい心をやしなひ・・・自然のありがたさを知って」欲しい、とうたっている。客観的事実を正確に、科学的説明をつけて、できるだけ網羅的に(子どもが興味をもてるように)提供することを目的とした、いわゆる子ども向け図鑑とは、明らかに異なる意図が、ここには読み取れる。すなわち、花を愛する心を養い、自然のありがたさに目を開いてもらうことを主眼にしているのである。(文中に「血なまぐさい戦場に咲く野菊の花を見ては、とほいふるさと思ふことをわすれません」(傍点筆者)という文が入っているが、戦中にもかかわらず意外で、少し驚く。)

「講談社の絵本」が、日本画の画家たちを積極的に登用したことは、改めて言うまでもないが、花鳥風月の写生画の伝統を持つ日本画が、上記の趣旨にはもっともふさわしい選択であったと、私は思う。荒木十畝以下30名の画家による花々は、写実的で、装飾的で、様式美に富む絵であり、各絵には著名な植物分類学者牧野富太郎による解説文が付き、欄外には画家西澤笛畝による添え書きがある。牧野富太郎の文は、例えば<アサガホ>と<ヒルガホ>では「アサガホハ ナツノアサ ハヤ オキキャウサウラ スルヤウニ ハヤクカラ サキマスネ。オネバウスルト アサガホニ マケマスヨ」。「ヒルガホハ アサガホニ ヨク ニテキマスガ ヒルマ サクノデ ヒルガホト ヨバレテ キマス」(巧まないユーモアを感じませんか)、<カイダウ>では「ハルノ アメニ ヌレテ サイトキル アカイ カイダウノ ハナハ ナントモイヘヌ ウツクシサデス」、<ホボヅキ>では「ハナヨリモ ミラ ヨロコバレマス。ナカミヲダシテ クチデ ナラシタリ ママゴトアソビノ オニンギャウニモ ツカハレマス」と、このように植物学的説明よりは、花にまつわる情感や連想を記している。欄外の解説も、<タンポポ>では「ふまれても咲くたんぽぽの笑顔かな」と俳句が、<サクラ>では「敷島の和大心を人間はゞ朝日にはほふ山櫻花」と和歌が、<キク>では「六日のあやめ、十日の菊」とことわざが紹介されて、それぞれに短いコメントがつけられている。<アサガホ>では、加賀の千代女の「あさがほにつるべとられてもらひ水」を挙げて、「ほんとにやさしい、思ひやりのある心をよんだ俳句です」と添えられている。このように花に関する知識を教えるより、花の美しさに感動し、花を愛でる心を養い、花に対する知識欲を誘うことを意図した作品で、植物学による解説を専らとした<花図鑑>とは一味違った「花づくし」であると言える。そして、「講談社の絵本」の他の多くの絵本とは違い、平和に満ち満ちている絵本だという点も、強調しておきたい。

『鳥づくしと動物物語』(昭和13 [1938] 年5月10日刊、Y11-N03-H419 これは『鳥づくし』がメインで、『動物物語』は巻末の特別読み物)も、『花づくし』の姉妹本である。こちらは、当時著名な鳥学者内田清之助が指導・解説をしている。彼も<まえがき>で(父兄母姉に宛て)「本書には、普通眼に触れる常識的な鳥は

一通り収めてありますから、これを繙く中に、おのづから鳥に親しみを持たせつゝ、自然に対する観察力を養ひ、同時にその情操を培つて行く事と信じます」と語り、鳥についての科学的知識の提供を優先目的にはしていない。本全体で＜鳥＞についての、ひいては自然に対する関心を喚起しようとしているので、『花づくし』と同じ意図と作りの本である。

内田清之助はまた、鳥学者として「以前の我が国の花鳥画には、科学的見地からは相当誤謬があつた」が、「荒木十畝畫伯が統率される読畫会の方々」がここに描いた画は「科学的にも全く申分」がないと折り紙をつけ、「無味乾燥な標本畫と違ひ、児童の眼に映ずる印象も、蓋し生々としたものがある」はずと、その花鳥画を誇っている。ここでも写実的で装飾的な、日本画の典型的な花鳥画が愉しめる。とりわけ＜鳥＞といっしょに＜花＞が描かれているのがいい。鳥は剥製のスケッチではなく、すべて野生の姿(生態画)で木々の枝にとまっているところを描いている。添え描きされた樹木や草花の名も記してあるので、＜花づくし＞をサブテーマとした感すらあり、中国伝来の花鳥図の系譜に連なる＜鳥づくし＞と言ってよいだろう。

昆虫学者古川晴男の監修による『虫ノイロイロ』（昭和16 [1941] 年10月5日刊、Y17-N03-H959）もまた、同趣向の＜づくし＞絵本で、西澤笛畝が絵を単独で描いている。対象のサイズが鳥よりも小さい昆虫なので、併せて描かれているのが草花や野草である。そして、それもまた虫といっしょに名が記されているので、文字通り＜草虫画づくし＞である。ここでも草虫が季節の進行で展開されている。例えば、春ならモンシロテフとナノハナ、夏ならアリとマツバボタン、秋はスズムシとカルカヤ、といった組み合わせと流れでまとめられている。

もう1冊『子供知識魚づくし』（昭和14 [1939] 年8月5日刊、Y11-N03-H405）も同類として挙げられる。川魚、海魚が共に扱われているが、花鳥虫と違って季節感が乏しいためであろう、絵は順不同、恣意的に並べられている。「講談社の絵本」に対しては＜名画集絵本＞という批判があるが、この作品ではその批判を甘んじて受けるとしても、上掲の＜づくし＞絵本と同じコンセプトで企画制作されていることに違いないので、ここでは読者は虚心に専ら、水中に棲む魚類の自然態を、その姿態の美しさを愛で、水中生物に対して積極的な興味をもち、魚の知識を求めるならば、編者の意図に十分応えたことになると思う。

このように花鳥虫魚の＜づくし＞絵本4冊をまとめて見てくると、対象とテーマのお蔭か戦時色は全くない、きわめてピースフルな絵本群であることがわかる。全体に時局に迎合的であった「講談社の絵本」の中にあるだけに、ユニークな企画の絵本群と評していい。そして、写真や博物画によらず、東洋の花鳥画の様式によった事も、積極的に評価したいと思う。

社会史的な興味から

上記の＜づくし＞よりも年少者向けに作られた＜子供知識絵本＞がある。

『楽しい遊び』（昭和13 [1938] 年7月10日刊、Y2-N03-H186）はその一つで、これは＜子ども生活歳時記＞と言える。オシャウグワツ（ハネツキ、タコアゲ、コママハシ）、2月ハツウマ（キツネの面）、3月ヒナマツリと進んで、梅雨時のテルテルバウズ、真夏のセミトリ、秋のカゲフミなどを経て、冬のユキガッセン、キロリバタへと、28葉で＜楽しい遊び＞が綴られている。中にはツミクサ、イシケリ、テマリツキ、また、時局柄センサウゴッコなど、私程の年齢の者には、いずれも郷愁を呼ぶ遊びが登場している。

『子供知識お家の道具』（昭和14 [1939] 年11月1日刊、Y2-N03-H191）では、家庭内で日常使っていた道具が描かれている。中にはもう骨董品に近いものもある。＜まえがき＞で「お道具を使用してゐる家庭生活の情景の一斑をも、併せ描いた」とあって、例えば、姉が裁縫をしている脇で、弟と妹が見ている図では、姉が使っている裁縫の＜クケダイ＞と＜ヘラダイ＞があり、弟は玩具の鉄兜と剣付き鉄砲を持っている。「ダイドコロダウグ」では＜ハヘチャウ＞＜ダイジフ＞＜ヒオコシ＞が、「センタクダウグ」では＜サンマタ＞＜センタクイタ＞など、今では呼び名が死語に近くなっている品も出てくる。

これら2冊を見ていると、子どもや大人の服装が和服・洋服入り混じっている。『動物園見物』（昭和16 [1941] 年3月1日刊、Y11-N03-H436）では、見物の観客たちの服装が昭和戦中期を思い出させる。女性は和服、男性は中折れ帽が多く、当然軍服姿も混じっていて、眼が動物より観客の方へ向いてしまう。（なお、これは上野動物園長古賀忠道が本文解説を書き、動物の生態、特徴を細かに記していて、先の＜づくし＞系のものと違う。正真正銘の＜動物図鑑＞で、動物園にいない動物の解説も載せている。）

児童文学（や大衆文学）には絵本や挿絵が多いので、過去の社会風俗・趣向を知るのに役立つ。映像の豊富な「講談社の絵本」は、その意味で資料的価値は高い。同じ頃の他の絵本や挿絵など使って昭和戦中期の時代風俗や風景を追えば、文学の社会史的研究ができるはずだが、ここでは消えてしまったものをたずねる気分で、もう数点を挙げてみよう。

『東京見物』（昭和12 [1937] 年4月1日刊、Y2-N03-H189）では、往年の東京の姿が垣間見られる。今では想像できないような羽田飛行場。とうに消えてしまった広瀬中佐像。昔の国技館も消えた一つ。^{やすたひ}安泰が描いている浅草から新橋へ通じる地下鉄（今の銀座線）。露谷虹児の描く銀座。多摩御殿を東山新吉が描いている。（新吉は東山魁夷の本名で、筆名としても使っており、『子供知識自然界のいろいろ』（昭和14 [1939] 年6月5日刊、Y17-N03-H950）では、＜ヤマ＞＜シマ＞＜キ＞の3葉も描いている。ついでに『日本の名所』（昭和14 [1939] 年10月1日刊、Y2-N03-H171）では、小野竹喬が＜富士山＞を描いている。）川島はるよの描く浅草仲見世通りは、今と雰囲気、賑わいぶりが違う。どれも郷愁の東京風景である。巻末には「大東京の絵統計」があって、江戸から東京への人口動態では、元

禄15年赤穂義士討ち入りの頃は50万人、黒船渡来の嘉永6年頃は56万人、以下、西南戦争期、日露戦争後と増えて、出版当時は5,875,388人。また、神社、寺、工場、学校、公園、図書館、病院、郵便局、ポストの数、省線、市電、トラック、乗用車などの数なども挙げられている。文字通りドキュメントである。

『乗物づくし』（昭和12〔1937〕年3月1日刊、Y11-N03-H418）も、往年の姿を伝えている。「ウスヒタウゲノ トネルヲ・・・キクワンシャニ オサレテ キシャガ デテキマス」とアプト式鉄道が描かれている。「ケムリハイテル オホシマガ クジラノヤウニ ミエテマス」と車掌が説明する熱海行きのボンネットバス。「東京―神戸ヲハジカン四十ブンデハシル」特急くつばめ号とその展望車。横浜―ロンドン間を45日間で結ぶ日本郵船の＜照國丸＞。機関車を修理する大宮鉄道工場。堺大浜と九州別府間の定期航空路を飛ぶ旅客用の飛行艇。東京と大阪間を1時間半で飛ぶ小型飛行機ビーチ・クラフト（「昭和十二年中に、二十台完成、各航空路につく予定」）など。

また『乗物エホン』（昭和15〔1940〕年4月10日刊、Y11-N03-H433）では、安井小弥太が＜大阪市電＞と、東京の＜渋谷駅＞の景を描いている。市電、省線、玉川電車、帝都電鉄、地下鉄、東横電鉄の集まる渋谷駅には「ヤガテコノエノヤウニ キレイニナリマス」という文が付いている。今の渋谷駅周辺と重ねると隔世の感を禁じえない。金子茂二が描く＜山のケーブル・カー＞では、「埼玉県三峰山の空中ケーブル・カーで、一台に二十一人乗ることが出来、徒歩で二時間あまりかゝる所をわづか八分で行けます」とコメントがある。

「講談社の絵本」では、上記の＜知識絵本＞と＜昔話＞が特に検討に値する、と私は思っている。ここは限られた紙数であるため、＜知識絵本＞に限って検討を試みたが、＜昔話＞については、幸いすでに西田良子氏による簡潔で的確な評価（『講談社の絵本―昔話』[ミネルヴァ書房『はじめて学ぶ日本の絵本史 2 15年戦争下の絵本』（YZ-726.5-トリ）所収]）があるので、参照なさることをお勧めしたい。

*引用部分は、原則として原文のままとした。

（よしだ しんいち 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授）

活動報告

(2007年1月～12月)

1. 展示会

国際子ども図書館では、子どもの本のもつ魅力を伝えるとともに、子どもと本との出会いの場を提供することを目的として、国際子ども図書館所蔵児童書を中心に一部他機関から借用した資料を交えて、子どもの本・文化に関する展示会を「本のミュージアム」で行っている。2007年は、2回の展示会を開催した。

○「大空を見上げたら―太陽・月・星の本」

[2007年2月10日(土)～9月9日(日) 計171日：入場者数41,797人]



展示会場：月の塔

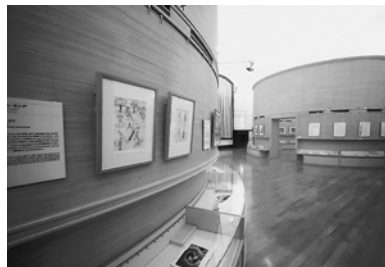
当館が所蔵する資料を中心に、太陽、月、星にまつわる伝承、文学から最新科学に至るまで、約300点の資料のほか、絵本原画、太陽や月の写真等の映像資料を展示した。また、子どもたちが天体に興味を持てるように、ロケットの模型や宇宙服のレプリカを展示するなど、資料以外の展示物にも工夫を凝らした。

今回の展示会は天文をテーマにしたためか、これまでの展示会に比べ、父親が子どもと一緒に来館する光景がよく見受けられた。(口絵および本文3～5ページを参照)

○「ゆめいろのパレットⅢ―野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」

[2007年9月22日(土)～2008年1月13日(日) 計84日：入場者数18,885人]

財団法人ユネスコ・アジア文化センターとの共催の展示会。アジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域における絵本画家の創作活動を奨励するために隔年で開催している野間国際絵本原画コンクールの第15回入賞作品の原画69点と、絵本約160冊を併せて展示した。また、9月21日(金)に、関係者を招いて、開会式及びテープカットを行った。(本文6、7ページを参照)



2. イベント

国際子ども図書館では、特定のテーマを設定した講演会や、展示内容への理解をより一層深めるため、各展示会に関連した講演会やギャラリートークを行うなど、様々な催物を開催した。

○講演会「神話から最新宇宙学まで」

[2007年2月17日(土)：参加者58名]

「大空を見上げたら―太陽・月・星の本」展の関連行事として、天文学者で大阪教育大学教授の福江純氏による講演会を開催した。古代における諸民族の宇宙観から説き起こし、太陽、太陽系、銀河、銀河団など宇宙の基本構造の説明、また、約137億年前のビッグバンとその直後に発生した宇宙のインフレーション等、最新の宇宙理論を紹介し、それに基づいて最終的に想定されるブラックホールの蒸発にいたるまでの宇宙の歴史について解説が行われた。(口絵および本文3～5ページを参照)

○＜子どものための絵本と音楽の会 エリック・カール「うたがみえるきこえるよ」＞

[2007年3月11日(日)2回実施：参加者200名（保護者を含む）]

「大空を見上げたら―太陽・月・星の本」展に親しんでもらうことを目的として開催した。東京のオペラの森実行委員会との共催で行ったこの催物は、上野公園エリアの各文化施設を会場として開催される「東京のオペラの森2007 NOMORI イベント・ウィーク」の一つでもあった。

司会の茂木淳子氏の自作童話の語りに続いて、大型スクリーンに投影した、エリック・カールの絵本『うたがみえるきこえるよ』に合わせ、ヴァイオリニストの漆原啓子氏がバッハのシャコンヌを演奏した。

○講演会「天文の魅力を探る」

[2007年4月22日(日)：参加者67名]

子ども読書の日の行事及び「大空を見上げたら―太陽・月・星の本」展の関連行事として、本展監修者で国立科学博物館主任研究員の西城恵一氏による講演会を開催した。

四季の星座、日食、月食など親しみやすい画像を大型スクリーンに投影しながら、様々な天体現象の説明が行われた。宇宙の基本構造の説明のほか最新の観測によって宇宙の年齢が約137億年とわかるに至った経緯などの説明があった。(口絵および本文3～5ページを参照)

○講演会「多文化社会における児童書・児童サービス」

第1部「本は世界への窓、自分を映す鏡―何故、多文化出版が重要なのか」

講師：パトリシア・アルダナ（IBBY 会長）

第2部「多文化へのまなざしーIBBY で私が出会った人々」

講師：末盛千枝子（JBBY 副会長、(株)すえもりブックス代表）

[2007年7月7日(土)：参加者67名]

パトリシア・アルダナ国際児童図書評議会（IBBY）会長を招へいし、国際子ども図書館主催、社団法人日本国際児童図書評議会（JBBY）協力による講演会「多文化社会における児童書・児童サービス」を開催した。（本文8～10ページを参照）

第1部：カナダの児童書出版社代表でもあるアルダナ氏が少数派の作家・画家を自ら発掘し、彼らの手による児童書を出版するに至った経緯を豊富な画像を用いて紹介した。また、多文化社会において、子どもたちが自信をもって生き抜くために、世界への窓であり、自分を映す鏡となるような多文化出版の重要性について力説した。

第2部：講師の末盛氏が2002年から4年間務めた IBBY の国際理事の経験、IBBY の大会で出会った人々の思い出を交え、貧困層の国の子どもたち、戦火の中の子どもたちへの本の必要性について講演した。

本講演会終了後、アルダナ氏歓迎のため、3階ホールで長尾真国立国会図書館長主催夕食会を実施し、皇后陛下がご臨席された。

○ギャラリートーク

[2007年6月16日(土)、6月30日(土)：参加者71名]

「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」展の期間中、職員によるギャラリートークを計4回実施した。

○＜星座早見盤を作ろう＞

[2007年7月22日(日)2回実施：参加者37名（未就学児童から中学生まで）]

「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」展の関連催物として開催した。講師は本展示会監修者で国立科学博物館主任研究員の西城恵一氏と国立科学博物館技術補佐員の中村隆氏であった。

参加した子どもたちは、国際子ども図書館で用意した星座早見盤作成キットを講師の説明に従って、加工し、組み立てた。作成後、西城講師が使用方法の説明を行った。（本文3～5ページを参照）

○講演会「昔話が語る天体」

[2007年8月28日(火)：参加者78名]

「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」展の関連行事として、口承文芸研究者

小澤俊夫氏による講演会を開催した。

昔話の天体にはそれぞれに対する人間のイメージが投影されているという総論のもと、星、月、太陽の具体例を示しながら、昔話に見られる特徴について解説があった。また、昔話の中には他の本から採ったものがあること、神話学では星は大きな問題とならないが昔話では重要であること、日本の天体に関する昔話には他と異なる際立った特徴があるようには思えないことなどについて講演した。

講演の中で、小澤昔ばなし研究所のスタッフによる昔話の朗読と国際子ども図書館職員による語りをを行った。(口絵および本文3～5ページを参照)

○研修「児童文学連続講座—絵本の愉しみ—アメリカ絵本の展開—」

[2007年10月15日(月)～17日(水)：修了者60名]

総合テーマを「絵本の愉しみ—アメリカ絵本の展開—」として、全国の公共図書館等において児童サービスを担当する職員と当館職員を対象とした児童文学連続講座を開催した。(本文16、17ページを参照)

○講演会「エジプトの児童文学と公共図書館—エジプトの読書運動—」

[2007年10月27日(土)：参加者65名]

「ゆめいろのパレットⅢ—野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アメリカ・ラテンアメリカから」展の関連行事として、エジプト児童文学作家のエマード・エル=シャフウェイ氏による講演会を開催した。

講演会にはワリード・マハムード・アブデルナーセル駐日エジプト・アラブ共和国大使が出席した。

エジプトを代表する古代と現代の二つのアレキサンドリア図書館について語った後、1991年から国を挙げて取り組んでいる「すべての人に読書を」運動の展開と成果について映像を交えて紹介した。

講演はアラビア語で行われ、NHK テレビ「アラビア語会話」講師のアルモーメン・アブドラー氏が通訳を務めた。(本文6、7ページを参照)

○第9回図書館総合展への参加

図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換の場として行われている図書館総合展が11月7日(水)から11月9日(金)まで、横浜市のパシフィコ横浜展示ホールで開催された。8回目の出展となった今年も東京本館と共に参加した。出展内容は電子図書館事業と書庫の紹介が中心であった。国際子ども図書館の広報を行うために、会場内でパンフレットの配布、ホームページのデモンストレーション等を行った。

3. 児童サービス

○「子どものへや」「世界を知るへや」の小展示

昨年に引き続き以下の4つの箇所で大展示を実施し、「世界を知るへや」では「かずの本」「ABCの本」を通年展示した。表紙を見せて本を展示することにより、多くの子どもが興味を持ち、手にとって楽しんでいた。

なお、2006年12月より、国際子ども図書館ホームページにて小展示の内容リストを掲載し、同内容の印刷物を展示期間中配布している。（「世界を知るへや：B」を除く）

（当館ホームページ―「子どものへやから」―「お知らせ」―「今月の小展示」参照）。

<子どものへや：A>

- 「冬のおまつり―新年編―」（1月）
- 「冬の動物ものがたり」（1月～3月）
- 「さくらのほん」（3月～4月）
- 「だいすきなおかあさん」（4月～5月）
- 「はのほん」（6月）、「夏の本」（7月～8月）
- 「芸術の秋」（9月～11月）
- 「ねずみのおはなし」（12月～）



<子どものへや：B>

- 「おおきい？ちいさい？おおきさいろいろ」（2006年10月～2007年1月）
- 「たんじょうび」（2月～3月）、「ちょっとおでかけ」（4月～5月）
- 「あそぼ～へやあそびの巻～」（6月）、「あそぼ～そとあそびの巻～」（7月～8月）
- 「あんな家　こんな家～住んでみたい　こんなところ～」（9月～11月）
- 「大人になったら何になる？～やってみたい　あんな仕事　こんな職業」（11月～12月）
- 「本の音楽会！」（12月～）



<世界を知るへや：A>

- 「うたおう！おどろう！」（2006年12月～2007年3月）
- 「お姫さまと王子さまのおはなし」（4月～6月）
- 「こわい話・ふしぎな話」（7月～11月）
- 「児童文学の旅―アメリカの大自然」（12月～）

<世界を知るへや：B>

- 「北欧からのおくりもの―子どもの本のあゆみ展関連展示」（2006年7月～2007年1月）

「大空を見上げたら―太陽・月・星の本展関連展示」（2月～9月）

「ゆめいろのパレットⅢ展関連展示」（9月～）

<世界を知るへや：C>

「かずの本」「ABCの本」（通年展示）

また、廊下に面した二つの小窓に、季節や行事にあわせて手作りした折り紙や人形などを本とともに飾り、子どもが親しみやすい雰囲気作りを心掛けた。<小展示については本文15ページも参照>

○「子どものへや」「世界を知るへや」での読書キャンペーン

昨年に引き続き、今年も子どもたちに本の魅力を伝えるための企画として「夏休み読書キャンペーン2007」を行った。本を読んで問題に答える形式にしたが、今年も設問のカードを初級編・中級編・上級編の三つにグレード分けし、子どもたちの年齢に合わせた本を読んでもらえるよう配慮したため、昨年の1.5倍近い1,200名以上の子どもたちの参加があった。小さい子どもたちや、やり方のよくわからない子どもたちには、職員が一緒について本を読んだり説明したりしたため、フロアワークの機会が格段に増えたことも収穫だった。

○子どものための催物

<子どものためのおはなし会>

職員によるおはなし会を、毎週土曜日・日曜日の午後2時から（4歳から小学1年生対象）と午後3時から（小学2年生以上対象）実施した。2007年は合計176回実施し、延べ1,233名が参加した。

おはなし会では主にストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行い、紹介した本のタイトルなどを記したプログラムを参加した子どもに手渡している。2005年7月末より実施している「おはなし会カード」の配布も継続している。参加ごとにスタンプを押印するカードには、1～2枚目は5個、3枚目以降は10個のスタンプ欄がある。2007年には複数名の子どもが延べ30回以上参加し、4枚目以降のカードを受け取った。中には参加回数が延べ50回を超えた子どももいた。

<ちいさな子どものための絵本の時間>

昨年に引き続き、3歳以下の子どものとその保護者1名を対象として、月に2度（第3土曜日とそれに続く日曜日の午前11時から）開催した。2007年は合計25回実施し、延べ192組404名が参加した。昨年と比較すると、組数は1.5倍、人数も約100名増と好評であった。絵本とわらべうたを組み合わせ、その日の参加者の年齢や個性に合わせたプログラムで行っている。日頃、わらべうたに親しむ機会の少ない参加者も、同じ遊びを繰り返し行ううちにすっかり覚え、素朴なメロディーや遊びを

存分に楽しんでいた。最近は、子どもを高く持ち上げて大きく振り動かす、といった身体を使ったわらべうたに、積極的に参加している父親の姿が多く見られる。



<子どものためのおたのしみ会>

春休み、こどもの日、冬休みには、普段のおはなし会の内容を拡大し、対象も4歳以上の1種類だけにして、大型絵本の読み聞かせ、パネルシアター、人形劇等を実施している。2007年は各日2回合計8回実施し、延べ140名が参加した。

<科学あそび「ふしぎな動きを楽しもう～ころがるマユと飛ぶタネ作り」>

7月28日(土)・29日(日)、各日2回計4回(各2コース)を、ホールおよびワークルームにて実施した。講師は職員が担当した。昨年に引き続き、今年も4歳から参加可能な「ころがるコース」と小学1年生から参加可能な「飛ぶコース」の2コースを設けて実施、両日合わせて延べ107名の参加があった。

「ころがるコース」ではビー玉にアルミホイルを巻いたものを筒に入れて作る繭形のおもちゃなど、ビー玉を用いて作る3種類のおもちゃの動きの違いを楽しみ、「飛ぶコース」では折り紙を使って“たね”の模型を作り、植物の種子が遠くまで飛ぶ工夫を学んだり、折り方を工夫すると紙飛行機の飛び方が変わることなどを学んだりした。

また、『手づくりおもちゃ大図鑑』(大月書店)、『とぶおもちゃ工作』(さ・え・ら書房)など、作成方法が掲載されている資料を紹介すると、子どもたちはその場で手にとって資料を読んだり、終了後、子どものへやで、資料を見たりしていた。

○子どもの見学

<通常の見学(団体向け)>

1月から12月までに、44件1,251名の見学を実施した。内訳としては、保育園・幼稚園10件394名、小学校8件319名、中学校13件147名、養護学校1件11名、インターナショナルスクール・日本語学級4件115名、その他8件265名*である。

*「夏休み子ども向け図書館見学ツアー」参加者を含む。(次項参照)

全面開館から6年目となり、毎年見学に訪れる団体や1年間に複数回訪れる団体があるなど、定着しつつある。

内容は、館内見学(子ども向け当館紹介ビデオの視聴を含む)、おはなし会、調べ学習の援助などを希望により組み合わせて対応している。また、事前の申請がなく、学級・学年単位など大人数で訪れるケースもあったが、可能な範囲で対応をした(見学統計には計上していない)。

＜夏休み子ども向け図書館見学ツアー＞

夏休み期間中、通常の団体向け見学を一時休止し、これまで要望の多かった子ども向けの図書館見学ツアーを5回実施した。参加者は119名。対象は小学生以上で、1回の定員を30名とし、内容を1時間程度の館内見学（子ども向け当館紹介ビデオの視聴を含む）に限定して行った。申込み方法を、文書ではなく、電話もしくは来館での予約に簡素化し、個人でも気軽に参加できるようにした。そのため、参加受付開始直後から問い合わせや申込みが多く寄せられ、各回とも早い段階でほぼ満員となった。見学終了後は子どものへやで行っていた読書キャンペーンへも誘導し、図書館の利用に効果的につなげることができた。今年は試行であったが、定員、実施回数の見直しを行い、来年以降の継続実施を検討する。

○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援を目的として、世界の国や地域に関する資料とその国の絵本や物語および原語の絵本などを、50冊前後のセットにして、学校図書館に1か月間貸し出すサービスである。申込みのあった学校図書館全てに希望セットの解題をまとめた小冊子を送付するほか、全セットの解題をホームページ上で公開している。

2007年1月からは、新たに「世界を知るセット」（小学校高学年向）を加え、既存の「世界を知るセット」（小学校低学年向）を絵本および昔話中心のセットに再構築し内容を一新した。2007年1月から12月までに延べ241校に計11,532冊の資料を貸し出した。

2007年は、2008年1月からの貸出開始に向けて、新たに「ヨーロッパセット」（小学校低学年向および小学校高学年向）を構築した。

○その他

利用実態を把握し、今後に生かすために8月以降、子どものへやでは「どの本が好き？」というアンケートを実施した。子どものへやに、「年齢」「性別」「また読んでみたいと思った本のタイトル」を記入する欄を設けた調査票を備え付け、任意でアンケートボックスに投函してもらった。子どものへや・世界を知るへやに開架している絵本、読物、知識の本など約1万冊を対象に、12月末までに273件のアンケートが寄せられている。分野などには特に偏りが出ていないが、小展示を行った資料を好きな本としてあげる子どもが多く見られた。



4. その他

○第5回国際子ども図書館連絡会議

[2007年6月20日(水)]

国際子ども図書館の昨年度の活動について報告し、本年度の計画及び将来計画について国際子ども図書館と協力関係にある諸機関から意見をいただくため、連絡会議を開催した。2007年の参加機関は、大阪府立国際児童文学館、国際交流基金情報センター、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金部、全国学校図書館協議会、東京子ども図書館、読書推進運動協議会、日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、日本図書館協会、NPO 法人ブックスタート、文部科学省生涯学習政策局社会教育課、同省初等中等教育局児童生徒課、同省スポーツ・青少年局青少年課、ユネスコ・アジア文化センターの16機関であった。

○児童サービス連絡会

[2007年11月21日(水)]

都道府県立図書館における児童サービスの現状と課題を把握し、情報共有を図るとともに、国際子ども図書館との連携・協力を強化することを目的に標記連絡会を開催した。メンバーは特色のあるサービスを行っている9機関(石川県立図書館、大阪府立中央図書館、岐阜県図書館、群馬県立図書館、東京都立多摩図書館、徳島県立図書館、福岡県立図書館、福島県立図書館、山口県立山口図書館)である。＜本文11～14ページを参照＞



5. 刊行物

- ・パンフレット：『国際子ども図書館』（日本語版）
- ・展示会「大空を見上げたら―太陽・月・星の本」小冊子
- ・『国際子ども図書館の窓』第7号*
- ・『児童図書館サービスのためのガイドライン』*
- ・『平成18年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「絵本の愉しみーイギリス絵本の伝統に学ぶー」』*
- ・利用案内：一般向け及び子ども向け。(日本語、英語、ハングル、中国語版)
- ・建物リーフレット

*…国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) に PDF ファイルを掲載しています。



数字で見る！

国際子ども図書館

(1) 国際子ども図書館所蔵統計 (2007年9月30日現在)

資 料 区 分					2007. 9.30現在 所 蔵 数		
資 料 情 報 課	図 書 (単位：冊)	日本語	児童書（＊１）		200,341		
			児童書関連書、参考図書		14,285		
			小 計		214,626		
		外国語	児童書（＊１）	欧米言語	39,749		
				アジア言語	16,169		
			児童書関連参考書		2,717		
			小 計		58,635		
		計				273,261	
	逐次刊行物 (単位：タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌		1,048	
				児童関連誌		753	
			外国語	児童雑誌	欧米言語	28	
					アジア言語	30	
				児童関連誌	欧米言語	80	
					アジア言語	6	
			小 計				1,945
			新聞	日本語			15
		外国語				1	
		非図書資料 (＊２) (単位：枚数及び 物品数)	静止画、紙芝居（＊３）		15,759 (1,211)		
	カード、カルタ（＊３）		9,055 (155)				
	マイクロフィルム		548				
	マイクロフィッシュ		35,924				
	音楽資料（レコード、CD、カセットテープ）（＊４）		1,157				
	映像資料（ビデオテープ、ビデオディスク）		3,703				
	電子資料（光ディスク、磁気ディスク）		1,147				
児 童 サ ー ビ ス 課	図 書 (単位：冊)	日本語		13,091			
		外国語		1,018			
		小 計		14,109			
	逐次刊行物（単位：タイトル）				20		
	非図書資料（単位：点）				264		

※2006年より国立国会図書館の基本統計に基づいた集計方法に変更。
付随して、集計時期を9月30日現在に変更した。

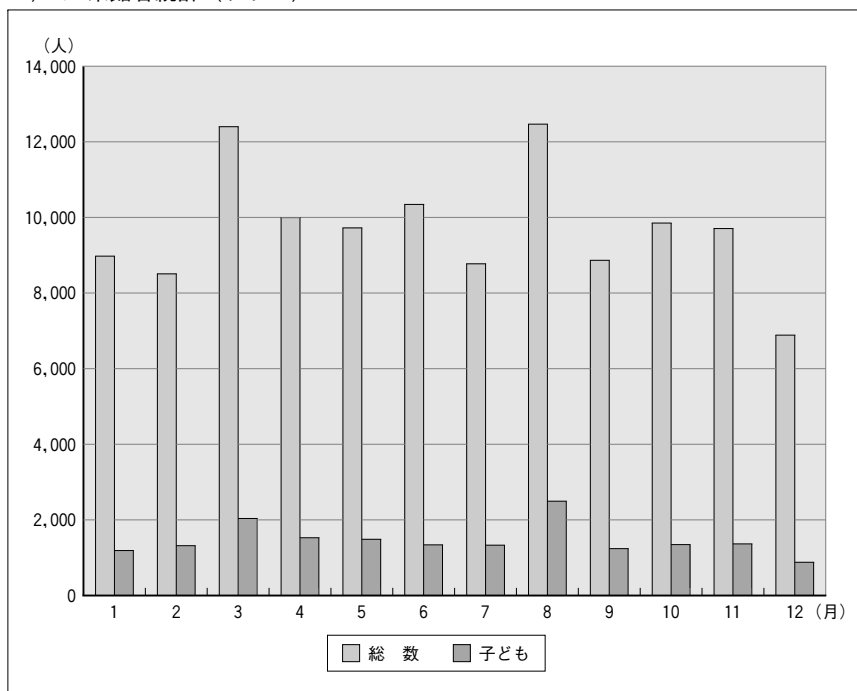
- * 1 学校教科書、教師用教科書、学習参考書、楽譜、組み合わせ資料を含む
- * 2 教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のものの数を含む
- * 3 括弧内はタイトル数
- * 4 教師用指導書のみ (児童書音楽資料は未所蔵)

(2) 国際子ども図書館利用統計 (2007年1月5日～12月27日)

1)-a 来館者統計・2000年5月6日～2007年12月27日までの総入館者数：896,188人

	合 計			曜 日 別 内 訳								
				火～金			土			日		
	日数	人 数		日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
		総数	子ども									
1月	22	8,975	1,189	14	4,561	326	4	2,048	512	4	2,366	592
2月	22	8,508	1,318	15	4,686	312	4	2,260	565	3	1,562	521
3月	26	12,399	2,038	17	7,358	433	5	2,958	592	4	2,083	521
4月	23	9,977	1,527	15	5,109	341	4	2,118	530	4	2,750	688
5月	24	9,721	1,487	16	5,060	316	4	2,906	727	4	1,755	439
6月	25	10,345	1,340	16	5,479	342	5	2,791	558	4	2,075	519
7月	25	8,772	1,329	16	4,813	301	4	1,803	451	5	2,156	431
8月	26	12,468	2,496	18	8,267	459	4	1,826	457	4	2,375	594
9月	24	8,865	1,240	15	4,331	289	5	2,412	482	4	2,122	531
10月	25	9,851	1,345	17	5,494	323	4	1,917	479	4	2,440	610
11月	23	9,706	1,365	16	5,665	354	3	1,503	501	4	2,538	635
12月	21	6,888	880	14	3,767	269	4	1,708	427	3	1,413	471
合計	286	116,475	17,554	189	64,590	342	50	26,250	525	47	25,635	545

1)-b 来館者統計 (グラフ)



2)「資料室」利用統計

	利用状況			資料室別			
				第1資料室		第2資料室	
	開室日数	人数	平均	人数	平均	人数	平均
1月	18	954	53	624	35	330	18
2月	19	1,116	59	729	38	387	20
3月	22	1,188	54	795	36	393	18
4月	19	854	45	549	29	305	16
5月	20	1,262	63	812	41	450	23
6月	21	1,113	53	739	35	374	18
7月	20	938	47	646	32	292	15
8月	22	1,654	75	1,072	49	582	26
9月	20	1,031	52	664	33	367	18
10月	21	1,186	56	769	37	417	20
11月	19	1,104	58	764	40	340	18
12月	18	840	47	557	31	283	16
合計	239	13,240	55	8,720	36	4,520	19

3) 本のミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

4)「子どものへや」利用統計

	利用状況						
	開館日数	人数	平均	大人		子ども	
				人数	平均	人数	平均
1月	22	3,945	179	3,206	146	739	34
2月	22	4,384	199	3,129	142	1,255	57
3月	26	5,951	229	4,156	160	1,795	69
4月	23	4,340	189	3,123	136	1,217	53
5月	24	5,264	219	3,763	157	1,501	63
6月	25	4,648	186	3,479	139	1,169	47
7月	25	4,199	168	3,013	121	1,186	47
8月	26	6,320	243	4,213	162	2,107	81
9月	24	4,194	175	3,146	131	1,048	44
10月	25	4,524	181	3,425	137	1,099	44
11月	23	4,835	210	3,563	155	1,272	55
12月	21	3,101	148	2,300	110	801	38
合計	286	55,705	195	40,516	142	15,189	53

5)「メディアふれあいコーナー」利用統計

	利用状況		
	開室日数	人数	平均
1月	22	4,485	204
2月	22	3,229	147
3月	26	4,970	191
4月	23	3,810	166
5月	24	3,970	165
6月	25	4,175	167
7月	25	3,528	141
8月	25	5,789	232
9月	24	3,989	166
10月	24	3,881	162
11月	23	4,025	175
12月	21	2,681	128
合計	284	48,532	171

※4/22、7/7、8/28、10/27は

午後休室

※8/19、10/16は全日休室

6) 複写サービス利用統計

	来館複写		郵送複写		計	
	件	枚	件	枚	件	枚
1月	424	2,497	48	205	472	2,702
2月	556	5,091	74	155	630	5,246
3月	600	3,471	78	202	678	3,673
4月	485	2,860	2	13	487	2,873
5月	820	4,167	8	110	828	4,277
6月	367	2,358	395	845	762	3,203
7月	513	3,403	969	2,494	1,482	5,897
8月	961	8,731	821	986	1,782	9,717
9月	764	3,936	628	758	1,392	4,694
10月	685	5,247	808	1,165	1,493	6,412
11月	725	3,860	525	774	1,250	4,634
12月	748	4,017	740	1,614	1,488	5,631
合計	7,648	49,638	5,096	9,321	12,744	58,959

7) 資料出納統計

	出 納 (第1 + 第2 資料室)	
	件	冊
1月	988	2,172
2月	1,111	2,838
3月	1,702	3,867
4月	1,061	2,565
5月	1,315	3,282
6月	1,232	3,006
7月	1,235	3,562
8月	1,966	4,145
9月	1,139	4,278
10月	1,581	3,643
11月	1,412	3,140
12月	1,371	3,550
合計	16,113	40,048

8) レファレンス統計

		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	小計
情報源・文献紹介	文 書		6	10	15	11	11	11	9	4	6	15	9	11	118
	電 話		3	5	3	2	4	1	1	2	9	5	2	1	38
	口 頭		29	35	24	25	34	38	28	36	15	30	29	22	345
簡易な事実調査	文 書		3	2	1	0	2	1	3	1	0	3	10	1	27
	電 話		4	2	0	5	4	4	4	5	3	3	6	6	46
	口 頭		19	5	17	3	3	6	6	15	7	16	10	8	115
書誌的事項調査	文 書		16	5	9	9	16	9	14	16	7	18	22	8	149
	電 話		2	2	0	2	7	3	1	4	4	5	4	7	41
	口 頭		10	9	15	12	8	16	3	16	10	6	10	10	125
所蔵調査	文 書		0	2	2	1	2	4	4	0	3	1	2	1	22
	電 話		14	13	25	15	48	30	20	30	25	34	21	31	306
	口 頭		109	95	128	103	90	92	68	117	72	78	77	47	1,076
所蔵機関調査	文 書		1	4	2	3	7	1	1	0	3	4	2	3	31
	電 話		0	2	5	2	9	4	4	5	1	0	0	1	33
	口 頭		13	15	17	9	14	21	16	33	13	15	18	5	189
類縁機関案内	文 書		0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	5
	電 話		3	2	2	1	6	3	2	5	4	0	2	0	30
	口 頭		11	10	10	8	14	8	5	9	7	10	4	1	97
利用案内・その他 (*)	文 書		2	4	0	1	2	3	6	2	2	2	4	2	30
	電 話		16	16	24	22	34	28	23	28	27	37	30	24	309
	口 頭		363	413	470	415	447	390	283	369	292	316	317	253	4,328
小 計	文 書		28	28	29	25	41	29	37	23	21	44	51	26	382
	電 話		42	42	59	49	112	73	55	79	73	84	65	70	803
	口 頭		554	582	681	575	610	571	409	595	416	471	465	346	6,275
総 計			624	652	769	649	763	673	501	697	510	599	581	442	7,460

※2006年までは資料室の処理件数のみを算出していたが、2007年から子どものへやの処理件数も加算した。

*「利用案内・その他」の口頭には「機器操作支援」、「検索援助」を含む

9) 資料貸出統計

	国会・行政支部図	図書館間貸出	展示会貸出・その他	合 計
	冊	冊	冊	冊
1 月	21	23	5	49
2 月	22	21	11	54
3 月	0	18	12	30
4 月	0	37	1	38
5 月	4	20	1	25
6 月	0	33	0	33
7 月	4	22	4	30
8 月	1	21	0	22
9 月	0	34	134	168
10月	1	17	11	29
11月	0	40	0	40
12月	0	10	0	10
合計	53	296	179	528

10) 国際子ども図書館見学統計

	企画協力課		児童サービス課		合 計	
	件数 (件)	人数 (人)	件数 (件)	人数 (人)	件数 (件)	人数 (人)
1月	12	98	2	108	14	206
2月	16	64	4	170	20	234
3月	14	133	3	71	17	204
4月	11	66	1	40	12	106
5月	12	75	6	92	18	167
6月	18	233	7	140	25	373
7月	17	111	7	147	24	258
8月	19	169	4	176	23	345
9月	14	183	2	62	16	245
10月	20	215	1	56	21	271
11月	18	169	5	98	23	267
12月	16	101	2	91	18	192
合計	187	1,617	44	1,251	231	2,868

11) 国際子ども図書館ホームページアクセス統計

	訪問者数	ページ参照数	再訪問者数
1 月	80,475	221,080	6,555
2 月	70,694	176,611	5,590
3 月	77,794	187,299	5,715
4 月	77,829	184,039	5,815
5 月	79,530	210,069	6,445
6 月	92,829	204,664	7,237
7 月	95,709	189,576	7,557
8 月	79,153	175,056	6,808
9 月	システム障害等の理由で採取ができなかったため、 9 月以降の統計については掲載していない。		
10月			
11月			
12月			
合計	—	—	—

これから…

国際子ども図書館の今後の予定をご紹介します。

<2008年>

1月26日～9月7日

展示会「チェコへの扉—子どもの本の世界」

3月23日 子どものための絵本と音楽の会「くるみ割り人形」
(東京のオペラの森実行委員会との共催)

3月29・30日

春休みおたのしみ会

4月26日 講演会「チェコの子どもと読書」

*「子ども読書の日」(4月23日)の行事を兼ねる。

5月5日 こどもの日のおたのしみ会

7月12日 講演会(演題等は未定)

7月26・27日

夏休み子ども向け催物(科学あそび)

9月20日～2009年2月下旬(予定)

展示会「日本の童画展(仮題)」

11月1・2日

秋のおたのしみ会

11月10・11日(予定)

児童文学連続講座

<2009年>

3月1日 『国際子ども図書館の窓』第9号刊行

3月14日～7月5日(予定)

展示会「ゆめいろのパレットⅣ(仮題)」

3月28・29日

春休みおたのしみ会

また、年間を通してさまざまな行事を企画します。詳しくは当館ホームページ
(<http://www.kodomo.go.jp/>)をご覧ください。下記へお問い合わせください。

国際子ども図書館 代表電話 03(3827)2053

利用案内

詳細は、当館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) をご覧いただくか、
代表電話 03 (3827) 2053へお問い合わせください。

☆来館利用案内

- 利用できる人** どなたでも利用できます（ただし第一資料室・第二資料室の利用は18歳以上の方に限られます）。
- 所蔵資料** 国内外の児童図書、児童雑誌、児童書関連図書・雑誌等
- 資料の利用** 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
- 資料請求** 9：30～16：30（於第一資料室・第二資料室）
- 開館時間** 9：30～17：00
- 休館日** 月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日は開館）、年末年始（12月28日～1月4日）、資料整理休館日（毎月第3水曜日）
- 休室日** 休館日のほか、以下の日が休室日となります。
- 2階 第一資料室・第二資料室：日曜日
- 3階 本のミュージアム：展示会準備等のための休室日／メディアふれあいコーナー：イベントのための休室日

☆レファレンスサービス

児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせについて、所蔵調査、所蔵機関調査、書誌の事項調査、簡易な事実調査、文献紹介等を行います。

申込み方法は、以下のとおりです。

- ◆直接来館 第一資料室・第二資料室にて受付
- ◆文書レファレンス 郵送または最寄りの図書館経由（ファクシミリ）にて受付
- ◆電話レファレンス 資料室開室時間中のみ

※電話では所蔵調査、利用案内、書誌の事項調査（目録記載程度）などについて件数を限って受け付けています。資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、および聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書をお願いします。

☆複写サービス

著作権法の範囲内で国際子ども図書館所蔵資料の複写（有料）を申し込むことができます。

◆来館による申込み

その日のうちに製品をお渡しする即日複写と、後日に製品を受け取る後日複写の二種類があります。

申込受付時間 10：00～16：00（後日複写は16：30まで）

製品引渡し時間 10：30～12：00、13：00～16：30

後日複写については、郵送により製品を受け取ることもできます。この場合、料金は後払い（振込）となります。

即日複写は、紙の資料の電子式複写（普通のコピー）とマイクロ資料からの電子式引伸（普通紙への引伸ばし）があります。1回の申込みで申し込めるページ数には制

限があります。大量の電子式複写、撮影によるマイクロフィルム作成等は後日複写となります。

◆郵送による申込み

国際子ども図書館ホームページ掲載の「郵送複写申込書」を用いて、郵送による複写の申込みを受け付けています。製品は郵送となり、料金は後払い（振込）です。

※2008年度早期に NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）を経由した申込受付を開始する予定です。詳細は国際子ども図書館資料情報課情報サービス係までお問い合わせください。

☆資料の図書館間貸出し

国際子ども図書館には、所蔵資料をお近くの公共図書館・大学図書館に貸し出す「図書館間貸出制度」があります。図書館間貸出しは「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみが対象となります。また、当館から借り受けた資料を借受館内で複写できるのは、複写利用についても申請して承認を受けた機関に限られます。お近くの図書館までお問い合わせください。

※雑誌や1950年以前刊行の図書など貸し出しできない資料もあります。

☆見学・ツアー

<大人向け>「としょかんコース」（毎週火曜日）と「たてものコース」（毎週木曜日）を実施しています。いずれも14時開始です。参加ご希望の方は、開始10分前までに1階事務室でお申し込みください。また、このツアーとは別に、申込みによる見学も行っています。詳しくは、企画協力課企画広報係までお問い合わせください。

<子ども向け>児童・生徒の見学については児童サービス課児童サービス係までお問い合わせください。

☆学校図書館セット貸出し

子どもの読書活動において重要な役割を担う学校図書館への支援を目的として、テーマごとに50冊前後で構成する資料のセットを貸し出します。

◆セットの種類

◎韓国 ◎北欧 ◎カナダ・アメリカ ◎アジア（中国・東南アジア諸国）

（各セットとも小学校高学年向と中学校向の2種類）

◎世界を知る ◎ヨーロッパ

（両セットとも小学校低学年向と小学校高学年向の2種類）

※2009年1月から「東アジア」、「東南アジア・南アジア」（両セットとも小学校高学年向と中学校向の2種類）の貸出しを開始する予定です。それに伴い「韓国セット」、「アジアセット（中国・東南アジア諸国）」は貸出しを中止する予定です。両セットは、「東アジアセット」、「東南アジア・南アジアセット」に再構成されます。

◆貸出期間：1 か月間（郵送にかかる日数を含む）

◆費用：セットを当館に返却する際の送料

※その他、詳細については、当館ホームページ「学校図書館へのサービス」―「学校図書館セット貸出し」をご覧ください。児童サービス課企画推進係までお問い合わせください。なお、ホームページでは、セットに含まれる資料の解説がご覧いただけます。

国際子ども図書館の窓 第8号 2008.3

発行所	国立国会図書館 国際子ども図書館	2008年3月1日発行
編集責任者	齋藤 友紀子	
〒110-0007	東京都台東区上野公園12-49	
	電 話 03 (3827) 2053 (代表)	F A X 03 (3827) 2043
	E-mail info@kodomo.go.jp	ホームページ http://www.kodomo.go.jp/
印刷所	株式会社 山越	

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No. 008 March 2008

Contents

【Frontispiece】	
【Foreword】	Yukiko Saito 1
【Highlights of 2007】	
Dealing with Science : Exhibition “Look up at the sky : Children’s Books on the Sun, Moon and Stars”	Exhibition team 3
Exhibition “Palette of Dream Colours Ⅲ – Winning Works of the 15 th Noma Concours for Picture Book Illustrations from Asia, Africa and Latin America”	Exhibition team 6
Lecture meeting : “Children’s Books and Services in a Multicultural World” inviting Ms. Patricia Aldana, President of IBBY	Planning and Cooperation Division 8
Conference on library services for children FY 2007 : Present situation and problems of library services for children	Children’s Services Division 11
Meet your favorite books! : Small exhibitions in the Children’s Library and the Meet the World of ILCL	Mariko Ishikawa 15
Report on the ILCL Lecture Series on Children’s Literature – Pleasure of picture books : development of American picture books –	Planning and Cooperation Division 16
New addition to Picture Book Gallery – “Modernism in the Picture Book : Art in Daily Life”	Planning and Cooperation Division 18
【World topics】	
The situation of children’s literature in Poland today	Masatoshi Kohara 19
Children’s literature in the Netherlands and Belgium today	Etsuko Nozaka 24
From an encounter at the Bologna Children’s Book Fair	Aki Fujishiro 29
The situation of children’s literature publication and services for children in Egypt and Iran	Kimiko Sakai 30
【Research report】	
Kodansha’s picture books on knowledge published in World War II	Shin’ichi Yoshida 33
【ILCL activity report】	38
【ILCL in figures】	47
【Schedule】	52
【User guide】	53